

ヴァリス

VALIS

フィリップ・K・ディック^{*1} 訳：山形浩生^{*2*3}

2007年4月5日

^{*1} ©1991

^{*2} <http://www.post1.com/home/hiyori13/>

^{*3} ©2004 山形浩生 委員会内部利用のみ、禁無断転載、禁無断複製

正しい道を示してくれた
ラッセル・ゲイレンへ

VALIS (アメリカの映画から。巨大活性知性生命体システム (Vast Active Living Intelligence System) の略)
: 自己監視型のマイナスエントロピー渦動が自律的に形成され、次第に環境を吸収・編入して情報の配列にするような現実フィールドへの介入。準意識と目的、知性、成長、円環的な均質性が特徴。

凡例：文中に*とついているのは、大瀧訳がかなり変だったり歪曲したり端折ったりしている部分。きちんと見てないので、ざっと目についた範囲だけ。

目次

第 1 章	1
第 2 章	9
第 3 章	21
第 4 章	33
第 5 章	53
第 6 章	69
補遺	75

第1章

ホースラヴァー・ファットの神経衰弱は、グロリアから電話がかかってきてネンブタールを持っているかときかれた日に始まった。なぜそんなものがあるの、と尋ねると、自殺するつもりなの、と言う。知り合いみんなに電話をかけていた。もう50錠あったけれど、確実に死ぬにはもう30錠か40錠要る。

即座にホースラヴァー・ファットは、これは彼女なりに自分に助けを求めているんだという結論にとびついた。自分に人が助けられるというのは、もう何年も続いているファットの妄想だった。前に精神科医に、治るには二つのことをしなきゃいけないよ、と言われた。ヤクをやめること(やめてなかった)そして人を助けようとするのをやめること(いまでも人を助けようとしてた)。

実はネンブタールなんか持ってなかった。睡眠薬なんか全然なかった。睡眠薬には手を出したことがない。アッパーの人だった。だからグロリアに自殺用の睡眠薬をあげるというのは、ファットの能力を超えていた。それに、手持ちがあってもあげたりはしなかったろう。

「十あるよ」とファットは言った。だってホントのことを言ったら電話を切られるから。

「じゃあそこまで車で行くから」とグロリアは正気で落ち着いた声で言った。錠剤を要求したのと同じ声の調子で。

そこで気がついたのだ。彼女は助けなんか求めちゃいない。死のうとしてるんだ。完全に狂ってる。正気なら、自分の目的を隠す必要があることくらい気がつく。死ぬつもりだとはっきり言うことで、グロリアはファットを自殺幫助の罪に陥れてる。同意したら、ファットはグロリアに死んで欲しいと思っていることになる。そんなことを願う動機はファットには　そして他のだれにも　なかった。グロリアは温厚で文明的だったけれど、LSDをやたらにやっていた。明らかにLSDが、前に話をして以来のこの六ヶ月で、彼女の頭をめちゃくちゃにしたんだ。

「どうしてたの」とファット。

「サンフランシスコのマウントザイオン病院に入ったたのよ。自殺しようとしたらお母さんに入れられたの。先週退院させてくれたわ」

「治ったの？」

「ええ」

これでファットは気がふれはじめた。この時には知らなかったけれど、ファットは口にするも忌まわしい心理ゲームに引き込まれたんだ。出口無し。グロリア・クヌードソンは、友人ファットを、自分自身の脳といっしょにめちゃくちゃにした。たぶん他にも六、七人、みんな彼女を愛していた友人たちを、これまで似たような電話でめちゃくちゃにしてきたんだろう。父親と母親を破滅させたのもまちがいない。ファットは彼女の理性的な調子の中にニヒリズムの響きを、虚無の反響を聞き取った。自分が相手にしてるのは人間じゃない。電話の向こうにいるのは、神経の反射弓ばいモノだ。

ファットが預かり知らなかったのは、ときには発狂するのは現実に対する適切な対応だということだった。グロリアが死なせてと理性的に言うのを聞くのは、汚染を吸い込むようなもの。中国の指罨みたいなもので、逃げようとして引っ張れば引っ張るほど、罨も固く閉まる。

「いまどこ？」とファット。

「モデスト。両親の家」

ファットの住まいはマリノ郡だったから、車で数時間かかる。自分なら、よほどの理由がなきゃそんなドライブはしないぞ^{*1}。これまた狂気のお膳立てだった。ネンブータル十錠のために、片道三時間のドライブ。車でどこかにつっこめばすむのに。グロリアは、その非理性的な行動すら理性的に実行していない。ティム・リアリーさんありがとうよ、とファットは思った。あんたと、そのヤクを通じた拡大意識の布教に大感謝だ。

これが自分の命を左右する話だということをファットは知らなかった。これは1971年のこと。1972年には、あいつは北のカナダはブリティッシュ・コロンビアのヴァンクーヴァーへ引っ越して、外国の町でたった一人、貧乏で怯えつつ、自殺しようとすることになる。いまのあいつは、そんなことを知らずにすんでいる。グロリアをなんとかだましてマリノ郡まで呼び寄せて、助けてあげただけだ。紙の大きい慈悲の一つは、永遠にぼくたちの目をふさいだままにしてくれることだ。1976年に、悲しみで完全に発狂したホースラヴァー・ファットは手首を切り（ヴァンクーヴァーでの自殺は失敗に終わったものだから）、高純度ジギタリスを49錠のみ、閉めきったガレージで車のエンジンをかけっぱなしにした。そしてそれでも失敗した。まあ肉体は、精神の知らないような力を持っているから、そしてグロリアの精神は肉体を完全にコントロールしていた。彼女は理性的に発狂していた。

ほどんどの狂気は、異様で芝居がかった様子からわかる。頭にフライパンをのっけて腰

^{*1} 訳注：この段落の前半部、大瀧訳はまったくでたらめ。

にタオルを巻き、全身紫色に塗って外に出たりするわけだ。グロリアはいつになく平静だった。礼儀正しく文明的なままだった。古代ローマか日本に住んでいたら、たぶんだれも気がつかなかっただろう。運転能力も、まるで損なわれていなかったはず。赤信号ではいちいちちゃんと停まり、制限速度も超えない　ネンブタール十錠をもらいに行く道中にも。

ぼくはホースラヴァー・ファットだ。そしてぼくはこれを、必要不可欠な客観性を得るべく三人称で書いている。ぼくはグロリア・クヌードソンを愛してはいなかったけれど、嫌いじゃなかった。パークレーでは、グロリアとその旦那は優雅なパーティーを開いて、ぼくと妻もいつも招かれた。グロリアは何時間もかけて小さなサンドイッチをつくり、いろんなワインを注いで回り、そして着飾っていて、その砂色でショートカットのカールがあった髪で、とってもきれいだった。

とにかく、ホースラヴァー・ファットはグロリアにあげるネンブタールなんか持ってなくて、一週間後にグロリアはカリフォルニア州オークランドのシナノン・ビル十階の窓から身を投げ、マッカーサー大通り沿いの舗道で全身をこなごなにたたきつぶし、そしてホースラヴァー・ファットは悲惨と病へのじわじわとした長い退行を続けた。それは天文物理学者たちの主張によれば全宇宙を待ち受けているはずのカオスだ。ファットは時代の先を、宇宙の先を行っていた。やがてあいつは、自分のエントロピーへの退行のきっかけとなった出来事を忘れた。紙は慈悲深くもぼくたちを、未来のみならず過去に対しても盲目にしてくれる。グロリアの死を知って二ヶ月、ファットは泣いてテレビを見てもっとクスリをやった　あいつの脳も死につつあったけれど、でもそれは知らなかった。紙の慈悲はまことに果てしない。

実はファットは、一年前に自分の妻も精神病で失っていたのだった。これはペストみたいなものだ。どこまでがドラッグのせいなのか、だれもわからない。当時　1960年代から1970年代　のアメリカとこの場所、北カリフォルニアのベイエリアは、完全にいかれてた。言いたくはないんだけど、でもホントだから仕方ない。かっこいい用語だの小難しい理屈だのでも、この事実は隠せない。警察当局は、自分の狩りたてる相手と同じくらい狂ってきた。体制派のクローンじゃないやつをみんな収監したがった。警察当局は憎悪まみれだった。ファットは、犬みたいなどう猛さで警察が自分に向かってうなるのを見た。黒人マルクス主義者のアンジェラ・デイヴィスをマリン郡刑務所から移送する日、当局は市民センターを丸ごとバラした。これはもめごとを起こそうとする過激派の目をくらませるためだった。エレベータの配線が切られ、ドアにはにせの表示が張り直された。地区検察官は身を隠した。ファットはこれをすべて見た*。その日、市民センターに図書館の本を返しにいったのだ。市民センターの入り口にある電子探知機のところで、おまわり

が二人、ファットの持っていた本と書類を引き破るように開いた。ファットはきょとんとした。その日一日、きょとんとさせられ続けた。カフェテリアでは、武装警官がみんなの食べる所を監視していた。ファットはタクシーで帰宅した。自分の車が怖かったし、自分の頭がおかしいんじゃないかと思ったからだ。確かに頭がおかしかったけれど、でもそれはほかのみんなも同じだった。

ぼくは職業的には SF 作家だ。妄想を扱う。ぼくの生涯も妄想だ。それでもグロリア・クヌードソンはカリフォルニア州モデストの箱の中で横たわっている。葬式花輪の写真がぼくのアльバムにある。カラー写真なので花輪がどんなにきれいだったかわかる。背景に駐車したフォルクスワーゲンが映ってる。そのフォルクスワーゲンに乗り込もうとしているぼくも映っている。式典のまっさいちゅうなのに。もうたまらなくなったんだ*。

墓所のところの式典が終わって、グロリアの前夫ボブとぼくと、ボブ　そしてグロリア　の涙みれの友人一人は、モデストの墓場近くの派手なレストランで遅い昼ご飯を食べた。ウェイトレスはぼくたちを奥の席に案内した。ぼくたち三人が、スーツにネクタイをしてもヒッピーみたいに見えたからだ。どうでもよかった*。何の話をしたかは忘れた。前の晩、ボブとぼく　じゃなくて、ボブとホースラヴァー・ファット　はオークランドまでドライブして映画『パットン』を観た。墓場での式典の直前に、ファットは初めてグロリアの両親に会った。亡き娘と同じように、二人は実に文明的にかれに接してくれた。グロリアの友人がたくさん、その気取ったカリフォルニア農場スタイルの居間にすわって、みんなを結びあわせている人物を回想してた。もちろんクヌードソン夫人はメイクが濃すぎた。女はだれかが死ぬとかならずメイクを濃くしすぎる。ファットは死んだ娘のネコ、毛主席と遊んでいた。自分の持っていないネンブタールを求めて彼女が自宅まで無駄足を踏んだときに、グロリアと過ごした数日間のことを思い出した。ファットがウソだったことを告げても、彼女はそれを冷静どころか無関心をもって受け止めた。死のうってときに細かいことは気にしないのだ。

「自分で飲んじゃったんだ」ファットはウソにウソを重ねたのだった。

二人はビーチまでドライブすることにした。ポイント・レイエス半島にある、太平洋に面したビーチだ。グロリアのフォルクスワーゲンで、運転はグロリアで（彼女が衝動的に、かれと自分自身と車を消失させるかもしれないとは、つゆほども思い当たらなかった）そして一時間後に二人は砂の上で大麻を吸っていた。

ファットが一番知りたかったのは、なぜ彼女が自殺したいのか、ということだった。

グロリアは何度も洗ったジーンズと、ミック・ジャガーのにやけ面が正面についたTシャツを着ていた。砂がいい感触だったので、靴は脱いでいた。ファットは、彼女の足の爪がピンクに塗ってあって、完璧にペディキュアされているのに気がついた。かれが内心

思ったのは、彼女は生きたままの姿で死んだ、ということだった。

「やつら、あたしの銀行口座を盗んだのよ」とグロリア。

しばらくしてファットは、彼女の計算ずくで雄弁な語り口から、「やつら」なんてのはいないんだ、ということに気がついた。グロリアが展開したのは、完全で容赦なき狂気の風景で、それが実にながちり構築されている。歯科工具のように厳密な道具だてで、あらゆる細部を埋め尽くした。その説明にはどこにも一分の隙もなかった。ファットはそこに何もまちがいを見つけられなかったけれど、もちろん唯一の例外がその前提で、それはだれもが自分を嫌っていて、自分をやっつけようとしていて、自分はあらゆる点で無価値だというものだった。しゃべるにつれて、彼女は消えていった。ファットは彼女が消えるのを眺めた。オドロキ。グロリアは計算尽くで、一言ごとに自分の存在を語り去った。合理性が利用されて　うーんと、非存在に利用されてるのか、とファットは思った。彼女の精神は巨大な優れた消しゴムになっていた。もうホントに残っているのは、彼女のどん殻だけ。つまり、中身のない死体だけ。

彼女はもう死んでるんだ、とファットはその日ビーチで気がついたのだった。

大麻を吸い終わって、二人は歩きながら海藻やら波の高さやらについてあれこれ話した。頭上ではカモメが鳴き、フリスビーのように滑空してる。何人がそこここにすわったり歩いたりしていたけど、でもビーチはほとんど無人だった。標識が、強い底流に注意と警告している。いくら考えても、どうしてグロリアがあっさり海に入っちゃわないのかわからなかった。彼女の考えはひたすらわからなかった。彼女に考えられるのは、まだ必要な、あるいは必要だと想像している、ネンブタールのことだけ。

「一番好きなグレイトフル・デッドのアルバムは『ワーキングマンズ・デッド』ね」とグロリアはある時点で言った。でもコカインを奨励すべきじゃないと思う。ロックを聴く子供は多いんだし」

「別に奨励してるわけじゃない。あの歌は単に、コカインをやってる人のことを歌ってるだけだ。そして間接的に、そのせいで死んだだろう。列車をぶつけて」

「でも、あたしがクスリを始めたのはそのせいなのよ」とグロリア。

「グレイトフル・デッドのせい、なの？」

「みんながあたしにやれと言ったから。もう人にやれと言われた通りにするのはいやになっちゃったの*」

「自殺なんかするなよ。おれと一緒に住もうよ。こっちは一人暮らしだし。きみのことも大好きだし。とにかくしばらく試すだけでもいいから。荷物はこっちで運ぶからさ、おれと友だちとで。一緒にできることもたくさんあるし、たとえば今日みたいにビーチに行ったりとか。ここ、すてきだろ？」

これに対し、グロリアは何も言わなかった。

「きみが自分を始末したりしたら、おれは残り一生すごくいやな気持ちになっちゃうよ」
こうしてファットは、彼女が生きるためのまちがった理由ばかりをあげつらったわけだ。他人へのお情けとして生きることになっちゃう。何年がかりで探しても、これよりひどい理由は見つからなかったろう。フォルクスワーゲンをバックさせてひき殺してあげたほうがましだ。だからこそ自殺ホットラインにはほんくらは配置させられないのだ。ファットは後にこれをヴァンクーヴァーで、自分が自殺しそうになってブリティッシュコロンビア危機センターに電話して専門家の助言をもらったときに学んだ。これと、あの日かれがグロリアに話したこととの間には何の相関もない。

足にくっついた小石をこすり落とそうと立ち止まってグロリアは言った。「今夜、一泊させてほしいんだけど」

これを聞いて、ファットは思わずセックスの光景を目に浮かべてしまった。

「すげえ」当時あいつはこういう口をきいた。カウンターカルチャーは、ほとんど何の意味も持たないフレーズを山ほど持っていた。ファットはそれをたくさん数珠つなぎにしたものだ。この時もそうで、あいつは自分が友人の命を救ったのだと、己自身の肉欲に幻惑されて思いこんだのだった。ファットの判断力は、もともと大したことなかったけれど、鈍重ぶりの最低記録をさらに更新したのだった*。やつのいい人の部分が宙ぶりになって、ファットの持っているバランスの中で宙ぶりになって、その時のやつが考えられるのはセックスの見込みだけ*。「いかす」と歩きながらやつは口ばした。「もうサイコー」

数日後、彼女は死んだ。その晩、二人はいっしょに過ごしたけれど、きちんと服を着たまま眠った。セックス無し。翌日の午後、グロリアは車ででかけた。モデストの両親の家から荷物を取ってくるという口実で。二度と彼女には会わなかった。数日にわたり、また顔を出すのを待っていると、ある晩電話がなって、元夫のボブだった。

「きみ、いまどこにいる？」とボブは尋ねた。

この質問には面食らった。家の電話のあるところ、つまり台所において、ボブは平静に聞こえた。「ここだよ」とファット。

「グロリアが今日、自殺した」とボブ。

*

毛主席を抱いたグロリアの写真を持ってる。ひざまずいてにっこりして、目が輝いてる。毛主席は下に降りたがってる。左にはクリスマスツリーの一部が見える。裏にクヌードソン夫人が几帳面な字でこう書いていた：

こうしてわたしたちの愛に対する感謝の念を抱いてもらいました*。

クヌードソン夫人がこれを書いたのが、グロリアの死の前なのか後なのか、ついぞわからなかった。クヌードソン夫妻はこの写真をぼくに、グロリアの葬式のこの写真をホースラヴァー・ファットに、グロリアの葬式の一月後に送ってくれた。ファットは彼女の写真が欲しいと手紙を書いたのだ。最初はボブに頼んだけど、きつい調子で「グロリアの写真なんてどうするつもりだ？」と詰問され、ファットは返事ができなかった。ファットがぼくにこれを書かせ始めたとき、どうしてあの依頼に対してボブ・ラングレーがあんなに腹を立てたのか、と尋ねてきた。わかんない。どうでもいい。もしかするとボブは、グロリアとファットが一晩一緒に過ごしたのを知ってて、焼き餅を焼いていたのかもしれない。ファットは、ボブ・ラングレーが分裂症だと言う。ファットによれば、当のボブ自身がそう言ったんだそう。分裂病者は、思考に適正な愛情が伴わない。「愛情の平坦化」なるものが生じる。分裂病者は、自分についてそういうことを言わないほうがいいとは絶対に考えない。一方で、ボブは墓地での式典の後でかがみこんで、グロリアのお棺にバラをのせた。これはファットがフォルクスワーゲンのほうに逃げ出したくらい頃だった。どっちの反応がもっと適正なんだろう。停めた車の中で一人で泣いてるファットか、それともバラを持ってかがみこみ、何も言わず、感情も示さず、でも何か行動を示した元夫か……ファットが葬式にもたらししたのは、モDESTに遅ればせながらやってくる道中で買った花束だけだった。クヌードソン夫人にそれを渡すと、本当にきれいですね、と言った。その花を選んだのはボブだった*。

葬式の後、ウェイトレスが三人を見えないところに案内した派手なレストランで、ファットはボブに、グロリアがシナノンなんかで何をしてたのかきいた。だって彼女は荷物をまとめてマリン郡まで車をとばし、自分といっしょに暮らすはずだったのにファットはそう思っていた。

「カーミーナが説得してシナノンに行かせたんだよ。クスリの前歴があったから」とボブ。カーミーナというのはクヌードソン夫人だ。

ティモシー、というのはファットの知らない友人だったが、こう言った。「まったく、ろくな役に立たなかったようだな*」

何が起きたかという、グロリアがシナノンの玄関に入った途端に、連中がすぐに彼女を狩り立てたのだった。だれかが、面接を待っている彼女の横を通りすぎりに、わざと彼女がすごく醜いと言った。次に彼女のそばを通りがかった人物は、あんたの髪の毛はネズミの巣みたいだ、と言った。グロリアは昔から、自分の髪の毛のカーリーな毛を気にしていた*。世界の他の髪の毛みたいにまっすぐだったらいいのに、と*。第三のシナノン団員が何を言うはずだったかは、考えるだけ無駄だ。その頃にはグロリアは、十階目指して上

がっていくところだったからだ*。

「シナノンってそういうとこなの？」ファットは訊いた*。

ボブ曰く「人格をたたきつぶす技術なんだよ。ファシスト療法で、人を完全に外からの指示に従わせて、グループに依存させるんだ。その後で、ドラッグ指向でない人格を作り直せる」

「自殺傾向があるってわからなかったのかな」とティモシー。

「もちろんわかってた。電話して話をしたたもの。名前も知ってたし、なぜきたかも知ってたよ」とボブ。

「彼女が死んで、やつらと話をしたのか？」とファット。

ボブ曰く「電話して、上層部に話をさせろと言って、お前らがうちの女房を殺したんだと言ってやったよ。そしたらそいつ、なんならここにやってきて、自殺傾向のある人の扱いを教えてくれ、だって。すっげえ動転してたよ。かわいそうなくらい」

このところで、これを聞いたことで、ファットはボブ自身も頭がどうかしてると思った。ボブは、シナノンをかわいそうとか言ってる。ボブはもうめちゃくちゃだ。みんなめちゃくちゃ。カーミーナ・クヌードソンも含め。北カリフォルニアには正気な人間なんて残っちゃいない。どっかよそに引っ越す頃合いだ。すわってサラダを食べながら、どこに引っ越そうかと思案した。国を出よう。カナダに逃げるんだ、徴兵抗議者たちみたいに。ベトナムで戦うのがいやでカナダにすり抜けた連中を十人、個人的に知っていた。たぶんヴァンクーヴァーでなら、知り合い半ダースくらいに出くわすだろう。ヴァンクーヴァーは、世界で最も美しい都市の一つだとされる。サンフランシスコと同じ、大きな港町だし。人生を一からやり直して、過去を忘れられる。

サラダをいじくりつつすわっているうちに、ボブが電話をかけてきたとき「グロリアが自殺した」と言わずに「グロリアが今日自殺した」と言ったのを思い出した。まるで彼女がいつか自殺するのは必然だったとでも言うように。ひょっとして、決め手になったのはこれかも、この想定かも。グロリアは時間制限を切られてたんだ、まるで数学の試験でも受けるみたいに。本当に狂ってるのはだれだろう。グロリアか自分か(たぶん自分だ)その元夫か、それともその全員か、ベイエリアか、それも比喩的な意味で狂ってるんじゃないか、ことばの厳密な専門的意味で狂ってるのは？ 精神病の最初の症状は、その人物が自分は精神病になりかけてるんじゃないか、と感ずることだと言う。これまた中国の指毘だ。そのことを考えようとすれば、実際にそれにならざるを得ない*2。狂気について考えることで、ホースラヴァー・ファットはだんだん狂気にすべりこんでいった。

ぼくがあいつを助けてあげられたらよかったのに。

*2 訳注：ここに大瀧がつけた注は頭痛がするほど間抜け。

第2章

ホースラヴァー・ファットを助けるために、ぼくができることは何もなかったけれど、でもあいつは結局死を免れた。救いにやってきた最初のものは、通りを下ったところに住む十八歳の女子高生の形をとり、二番目が紙様だった。両者のうち、女の子のほうが有能だった。

紙様のほうは、少しでも役にたったのかどうか。実はある面では、紙様はあいつの病気をもっとひどくした。これはファットとぼくとで意見が一致しない話題だった。ファットは、紙様が自分を完全に癒してくれたと確信していた。そんなことはあり得ない。易経にはこんな下りがある；「いつも病気だが決して死なない」*1。これはまさに我が友人だ。

ステファニーがファットの人生に入ってきたのは、ヤクの売人としてだった。グロリアが死んでからファットはクスリをやりすぎて、あらゆる入手源からクスリを買いあさる必要が出てきた。高校生やらヤクを買うのは、あまり賢い動きじゃない。ヤクそのものはどうでもいいんだけど、法と道德の問題がある。子供からヤクを買ったが最後、目をつけられる。理由は説明するまでもないでしょ。でもぼくが知っていたのは　そして当局が知らなかったのは　こういうことだ。ホースラヴァー・ファットは、実はステファニーが売っていたヤクには興味がなかったんだ。彼女はハッシシと大麻は扱ったけれど、アッパーは売らなかった。アッパーは納得いかないんだと。ステファニーは、自分の納得いかないものは決して売らなかった。どんなに圧力をかけられても、幻覚剤は売らなかった。ときどきコカインは売った。その根拠はだれにもわからなかったけれど、でも何らかの根拠づけがそこにはあった。通常の意味では、ステファニーはまるで考えなかった。でも決断は下したし、いったん決断を下したら、だれもそれをひっくり返せない。ファットは彼女が気に入っていた。

それが話の要点だ。あいつが好きなのは彼女であってヤクではなかったけれど、でも彼

*1 訳注：ここの部分に大瀧がつけた訳とコメントは失笑もの。『死の迷路』解説でも述べたが、ディックは易経は特に何も考えずにそらの訳を参照しているだけで、ナントカの解釈をことさら採用しているわけじゃない。また、コメントにはかれがその解釈を採用したことが「重要である」と書いてあるけれど、具体的にどう重要なのかまったく説明がないし、実際その後その重要性を示すコメントは一つもない。

女との関係維持には買い手である必要があって、つまりハッシシをやる必要があったということだ。ステファニーにとって、ハッシシは人生の始まりにして終わり 少なくとも生きる価値のある人生の だった。

紙様ができの悪い二番手でやってきたにしても、少なくともステファニーのような違法なことはしていなかった。ファットは、ステファニーが牢屋にぶちこまれると確信していた。いつ逮捕されてもおかしくないと思っていた。ファットの友人たちはみんな、ファット自身がいつ逮捕されてもおかしくないと思っていた。みんなそれを心配し、またあいつがゆっくりと憂鬱症や神経症や孤独に落ち込むのを心配していた。ファットはステファニーのことを心配した。ステファニーはハッシシの値段を心配した。それ以上に、コカインの値段のことを心配した。彼女が真夜中にガバッと起きあがって「コカインがグラム百ドルに値上がりしたわ！」と叫ぶところをみんなで想像したりしたっけ。ヤクの値段に関するステファニーの心配ぶりは、普通の女性がコーヒーの値段を心配するのと同じだった。

ぼくたちみんなで、ステファニーは六〇年代以前には存在できなかったと論じたものだ。ヤクが彼女を存在させ、まさに地面から召喚したのだ。彼女はヤクの係数で、ある方程式の一部だった。そしてそれでも、ファットがやがて紙様への道をたどるようになったのは、彼女を通じてのことだった。彼女のヤクを通じてじゃない。ヤクは全然関係なかった。ヤクを通じた紙様への道なんかない。あれは性悪な連中が売りつけるウソだ。ステファニーがホースラヴァー・ファットを紙様に導いたのは、彼女が蹴りろくろで作った小さな粘土の壺経由でのことだった。その蹴りろくろは、彼女の十八歳誕生日プレゼントとして、ファットが支払いの一部を負担してやったものだ。カナダに逃げたときも、その壺は下着や靴下やシャツにくるんで、たった一つのスーツケースに入れて持って行った。

それはふつうの壺に見えた。ずんぐりして薄い茶色、縁に青い釉薬が少々。ステファニーは特に上手な壺作りじゃなかった。この壺は、彼女が初めて作った壺の一つだ 少なくとも高校の陶芸の授業以外では*。当然ながら、最初の壺の一つはファットにわたることになる。彼女とファットはとても仲がよかった。あいつが取り乱すと、ステファニーは自分のハッシシパイプをたっぴりすわせて落ち着かせた。でもその壺はある点でふつうじゃなかった。その中に紙様がまどろんでいたんだ。紙様はその壺の中で長いことまどろんでいた。もう長すぎるくらいに。一部の宗教では、紙様は最後の最後になって介入する、という説がある*²。そうなのかもしれない。ぼくにはわからない。ホースラヴァー・ファットの場合、紙様は本当に最後のギリギリのところまで待って、その時でさえ、かれのやったことはギリギリの最小限でしかなかった。ギリギリ最小限で、ほとんど手遅れと

*² 訳注：大瀧は「11 時に」が「最後になって」を意味する慣用句なのを知らないのか敢えて歪曲したのか、直訳したあげくにくだらない引用をして悦に入っている。

いっていいくらい。それはステファニーのせいじゃない。彼女は蹴りろくろを手に入れてすぐに壺をつくり、釉薬をかけて焼いた。彼女は友人ファットを助けるべく手を尽くした。ファットは先だったグロリアみたいに死に始めてたんだから。ファットが友だちを助けようとしたのと同じく、ステファニーも友だちを助けたけれど、ステファニーのほうが上手だった。でも、それが彼女とファットとの差だ。危機にあって、彼女はどうすればいいか知っている。ファットは知らない。だからファットは生き延びてグロリアは死んだ。ファットはグロリアより友だちに恵まれた。あいつにしてみれば、逆だったらよかったのと思うかも知れないけれど、それはあいつが選べることじゃない。自分で自分にいろんな人を差し出すわけじゃないもの。それをやるのはこの宇宙だ。宇宙は何らかの決断を下して、その決断に基づいてある人は生き、ある人は死ぬ。厳しい法則だ。でもあらゆる生き物は、仕方なくそれに従う。ファットは紙様を得て、グロリア・クヌードソンは死を得た。不公平だし、それをまっさきに主張するのはファットだろう。その点はあいつも認めてやらないと。

紙様に会ってから、ファットは紙様への不自然な愛を抱くようになった*。それはふつうだけれど「紙様を愛する」というときの愛じゃない。ファットの場合、それは本物の飢餓感だった。そしてもっと変なことに、あいつはぼくたちに、紙様が自分を傷つけて、それでも自分はアル中が酒を渴望するように紙様を渴望するんだ、と語った。あいつの話だと、紙様はピンクの光線をまっすぐ当てたんだと。その頭に、目に。ファットは一時的に目がくらみ、何日も頭痛がした。目の前でフラッシュがたかれたときに、燐光の残像として見えるものとまったく同じ。ファットはその色に霊的に取り憑かれていた。ときどきそれはテレビの画面に出てきた。あいつはその光を求めて生きた。その特定の色だけを求めて。

でも、それを二度とまともに見つけることはできなかった。光のその色を生成できるのは紙様だけだった。言い換えると、通常の光にはその色は含まれていない。あるとき、ファットは色彩表を調べた。可視スペクトルの一覧だ。その色はなかった。あいつはだれにも見ることのできない色を見た。それは端からはみ出したところにあった*。

周波数的に光の次にくるものってなんだっけ？ 熱かな？ 電波？ 知ってるべきなんだけれど、知らない*。ファットの話では(これがどこまでホントか知らないけれど)太陽光スペクトルの中でかれが見たのは700 ミリマイクロン以上だとか。フラウンホーファー線で言うと、B を A に向かって過ぎたあたりなんだと*。好きなように解釈してくれ*。ぼくに言わせると、これはファットがいかれた症状の一つだと思う。神経衰弱で苦しんでいる人は、しばしばたくさん調査をして、自分に何が起きているか説明を見つけようとする。調査はもちろん、失敗する。

失敗するというのはぼくたちから見ればの話だけれど、不幸な事実として、それは時には崩壊中の精神に対しインチキな裏付けを与えたりする グロリアの「やつら」みたいに。ある時フ라운ホーファー線というのを調べてみたんだけど、「A」なんてのはない。ABC 順で見つかる一番最初のやつは B だ。フ라운ホーファー線は G から B へ、紫外域から赤外域へと進む。それだけ。それ以上はない。ファットの見たもの、あるいはファットが見たと思ったものは、光じゃなかったのだ。

あいつがカナダから戻って 紙様を手に入れてから ファットとぼくはいっしょに長時間過ごして、そして夜にいっしょに出歩くうちに（これはぼくたちのよくやることで、アクションを求めてさまよい、何が起きているか見て回るのだ）、ある時駐車しようとしていたら、いきなりぼくの左腕にピンクの光の点があらわれた。それまで見たことのないものだったけれど、なんだかわかった。だれかがぼくたちにレーザー光線を向けてたんだ。

「レーザーだよ」とぼくはファットに言った。ファットもそれを見たからだ。その光点は電柱やらガレージのコンクリート壁やら、そこらじゅう動き回っていたんだもの。

通りのずっと向こうにティーンエイジャーが二人立っていて、その間に四角い物体を抱えている。

「あいつらがこれを作りやがったんだ」とぼく。

ガキ二人はにたつきながらこっちにやってきた。何かキットから組み立てたんだ、と話してくれた。いかに感銘を受けたか話してやると二人はだれか別の人を脅かしに歩み去った。

「あの色のピンク？」とぼくはファットに尋ねた。

あいつは何も言わなかった。でも、腹を割って話してもらっていない気がした。ぼくは、あいつの言う色を見たことがあるという気がしていた。もしそうなら、なぜそれを言ってくれないのか、ぼくにはわからない。それを認めたら、もっとエレガントな理屈が壊れるからなのかもしれない。精神障害者は、科学的単純性の原理、つまり与えられた事実を説明するのに最も単純な理論を採用する、という考え方をとらない。連中はバロック的に、理屈をごてごてと太らせるほうを選ぶ。

あいつを傷つけ、目をくらませたピンク光線の体験をめぐってファットがぼくたちに強調した重要な論点はこういうものだった：あいつは即座に 光線が自分にあたったとたんに これまで知らなかったようなことを知った、という。具体的には、自分の五歳の息子が診断で見落とされている誕生時の障害を持っていて、その生まれつきの障害が何かを解剖学的な細部に至るまでわかった。それどころか、医師に伝えるべき医学的詳細までわかったのだそう。

ぼくはあいつが医師にそれをどう告げるか見たかった。どうやって医学的な細部がわかったかを説明するところを。あいつの脳は、ピンク光線が叩きつけた情報をすべて捕捉したけれど、でもどうやってそれを説明する？

ファットは後に、宇宙は情報でできているという説を編み出した。かれは日誌をつけはじめた。実はそのずいぶん前からこっそりつけていたのだった。イカれた人物のコソコソした行動。紙様との出会いは、ページの上にかれのファットの、紙様のじゃないよ筆跡ですべて書かれていた。

「日誌」というのはぼくの言い方で、ファットのじゃない。あいつの用語は「釈義」で、これは聖典の一部を説明解釈する書き物を指す神学用語だ。ファットは自分に向けて発射されて次第に頭に入り込んだ情報が、聖なるところから出てきたもので、だから一種の聖典としてとらえるべきだと信じていた。それが適用されるのが、睾丸瘤を破って陰嚢にまで落ち込み、診断から見落とされた右の鼠蹊ヘルニアに適用されるだけだったとしても。ファットが医師に告げたニュースはこれだった。このニュースは実は正しくて、ファットの前妻がクリストファーを検査に連れて行ったときに確認された。翌日に手術の予定を入れられた。つまりは、できるだけすぐに、ということだ。外科医はファットと前妻に向かって嬉々として、クリストファーの命はもう何年も危うかったんだと告げた。自分の腸がからまって夜中に死んでしまった可能性もある。われわれ（かれら）が見つけてよかったですよ、と外科医。というわけでまたもやグロリアの「かれら」だけど、この場合にはこの「かれら」はホントに実在した。

手術は成功で、クリストファーがやたらに愚痴るのも止まった。生まれてからずっと苦痛にさらされていたんだ。その後、ファットと前妻は息子を別の一般医に連れて行った。もっと目のある医者に。

ファットの日誌の段落の一つにはすごく感心させられたので、書き写してここに入れておこう。右鼠蹊ヘルニアの話はしてなくて、もっと一般的な性格のもので、宇宙の本質は情報だというファットのますます強化されてきた見解を表明したものだ。あいつがそんなことを信じるようになったのは、あいつにとって宇宙、あいつの宇宙、ってのは、実際に急速に情報と化しつつあったからだ。紙様は、いったんあいつに向かってしゃべりはじめたら、二度と口を閉じないらしい*。聖書にそんなことは書いてなかったと思うぞ。

日誌記述 37。脳の思考は、われわれには物理的宇宙の中の並び方や並び替え

変化として体験される。でも実は、それは実際にはわれわれが物質化している情報と情報処理なのである。われわれは脳の思考を単なる物体として見るだけでなく、むしろ物体の運動、あるいはもっと正確には、物体の配置として見る。でも並び方のパターンは読み取れない。そこにある情報を抽出することはできない

つまりそれを、その実体である情報としては引き出せない。脳による物体の結びつけや結び直しは、実は言語なのだけれど、でもわれわれの言語のようなものじゃない(というのもそれは自分自身に向かってのもので、自分の外のだれかや何かに向かってのものじゃないからだ)。

ファットはこの個別テーマを何度も何度も練り直した。日誌の中でも、友人たちとの口頭での対話の中でも。あいつは、宇宙が自分に話しかけ始めたんだと確信していた。日誌の別の記述はこんな具合だ。

36. この情報、あるいはこの叙述は、自分の中の中立的な声として聞くことができるはずだ。でも何かがおかしくなった。すべての創造物は言語だし、言語以外の何物でもないのだけれど、でもそれは何か説明のつかない理由のために、われわれは外にあるものを読むこともできないし、自分の中で聞くこともできない。だから、われわれは白痴になったんだと言おうか。なにかがわれわれの知性に起こった。おれの理由づけはこうだ：脳の部分の並び方が言語だ。われわれは脳の一部だ。したがってわれわれは言語だ。だったら、なぜわれわれはこれを知らないのか？ われわれは自分がなんであるかさえ知らず、まして自分がその一部を構成する外的現実が何なのかなんてまるで知らない。「白痴」ということばの期限は「私的」ということばだ。われわれはそれぞれ、私的存在となってしまう、もはや脳の共通の思考を共有していない 識閾下の水準以外では。よってわれわれの実際の生活と目的は、われわれの識閾以下で執行されている。

これに対してぼくは個人的にこう言いたくてたまらない：ファット、そりゃテーマだけの話だろ*。

長いことかけて(あるいはファットなら「広大なる永遠の砂漠を経て」と言うだろう)ファットは自分の紙様との接触を説明するための、へんてこな理論をたくさん開発した。その一つは他とはちがっていて、ことさら面白いなと思えた。それはファットによる、自分が体験していることについての精神的な条件降伏とも言うべきものだった。この理論では、実際にはあいつは何一つ体験しちやいなんだという。脳の部位が選択的に、遠くから発しているエネルギービーム、ひょっとして何百万キロも遠くから放たれたビームによって刺激されているのだ。こうした選択的な脳部位の刺激はあいつの頭の中に、自分がホントにことばや絵や人の姿や印字ページ、つまりは神様や神様のメッセージ、あるいはファットお好みの表現ではロゴスを見聞きしているんだ、という印象を あいつに対して 生成している。でも(この理論によれば)実はあいつは、そういうことを体験したと想像しているだけだ。それはホログラムみたいなもの。ぼくがびっくりしたのは、キチ

ガイが自分の幻覚をこんな洗練された形で割り引いたものになっているという奇妙さだった*。ファットは知的に、自分を狂気のゲームから足抜けさせてしまい、同時にその光景や音を楽しんでいた。実質的にあいつは、もはや自分が体験したことが実在していたとは主張していないわけだ。ということは、あいつが治り始めたしるしだろうか？ まさか。いまやあいつは、「やつら」だか紙様だかだれだかは、長射程緊密高密情報エネルギービームをファットの頭に集中させているんだという見方をするようになっていた。これじゃちっとも改善してないとぼくは思うけれど、でも確かに変化ではある。ファットはいまや心から自分の幻覚を割り引いて見ることができて、つまりは幻覚を幻覚として認識するようになったということだ。でもグロリアと同じく、あいつもいまや「やつら」を持っていた。ぼくに言わせれば一歩進んで二歩下がるたぐいの勝利*。ファットの人生は、まさにその手のセコイ勝利の定番話みたいに見えて仕方なかった。たとえば、かれがグロリアを救ったやりかたみたいに。

ファットが何ヶ月も何ヶ月もがんばった釈義は、その手の一歩進んで二歩下がる勝利としか思えなかった*。一歩進む分の勝利があったとしてもだ。この場合には、悩みを抱えた精神が、不可解なものに意味を見いだそうとする試みでの勝利。もしかすると、精神病ってのは要するにそういうことなのかも。理解不能の出来事が起こる。人生がかつては現実だったもののインチキめいた大波小波のゴミためになる。そしてそれだけじゃない

それだけじゃ不足だとも言うように。その人は、それでもファットと同じように、その上下動についていつまでも考え続けて、それを何らかの一貫性の中におさめようとしてみるけれど、でも実は何も筋が取らず、ただすべてを自分の認識できる形やプロセスに還元したいという必然性のために自分が押しつける勝手な解釈だけが意味をなす。精神病でまっ先に逃げ去るのがおなじみのものだ。そしてその代わりに出てくるのは悪い知らせばかりで、それは理解不能なだけじゃなくて、他人にそれを伝えることもできない。狂人は何かを体験するけれど、それが何でどこからきたかはさっぱりわからない。

ファットの風景が砕け散った時点は、グロリア・クヌードソンの死にまでさかのぼれるけれど、その真ん中でファットは、紙が自分を治してくれたと想像していた。いったんセコイ勝利が目についたら。もうそこら中に見かけるようになる。

昔知り合いだった、ガンで死にかけの女の子を思い出す。お見舞いに行くと、彼女はもう見てわからないほど変わり果てた。ベッドに起きあがった彼女は、小さな毛のないお爺さんみたいだった。化学療法のおかげで、でかいブドウみたいにふくれあがってた。ガンと治療法のおかげで彼女はほとんど目も見えず、つんぼ寸前、絶えず痙攣を起こしていて、ぼくがかがみ込んで気分はどうかと訪ねたら、こう答えた（ぼくの質問が理解できたときだけだが）*；「紙様が癒してくれているのがわかるの」。彼女は宗教に入れ込ん

でいて、修道院に入りたいと思っていたのだった。ベッド脇の金属のスタンドに、彼女自身だかだれだかが、彼女のロザリオをきれいに置いていた。ぼくに言わせれば、それが「紙様くそくらえ」の標識なら適切だったろう。ロザリオは不適切だ。

でもなんだかんだ言いつつ、紙様 あるいは紙様と自称するだれか、といってもこれは単なることばのちがいでしかない が貴重な情報をホースラヴァー・ファットの脳に放射して、おかげで二人の息子クリストファーの命が助かったことは、認めざるを得ない。紙様はある人は救い、ある人は殺す。ファットは、紙様はだれも殺さないと言う。病気、苦痛、不当な苦しみは、紙様からからじゃなくて、どこか別のところから生じるんだ、と。これに対してぼくは尋ねる：その「どこか別のところ」はどこから出てきたの？ 紙様って二人いるの？ それとも宇宙は紙のコントロール下から逃れちゃったわけ？ ファットはプラトンを引用したもんだった。プラトンの宇宙論では、ヌースまたは精神が、アナンケまたは盲目的な欲望 あるいは一部の専門家によれば盲目的な偶然 を屈服させる。ヌースがぶらぶら歩いていると、驚いたことにたまたま盲目的な偶然を見つけちゃったというわけだ。盲目的な偶然、言い換えればカオスに対し、ヌースが秩序を押しつけたわけだ（ただしこの「説得」がどうやって行われたのか、プラトンはどこにも書いていない）。ファットによれば、わが友人のガンは知覚ある形になるよう説得されていない無秩序でできているそうだ。ヌースまたは紙様は、まだ彼女のところまで手がまわっていないだけだ、という。これに対してぼくは言う。「ふん、手がまわるようになった頃にはもう手遅れだったわけだ」。ファットはこれに答えられなかった。少なくとも口頭での反論としては、たぶんこそこそ逃げ出して、日誌にこの話を何か書いたんだろう。あいつは毎晩朝4時まで起きていて、日誌にこちゃこちゃ書き込んでる。たぶん宇宙の秘密のすべてが、あのがらくたの中のどこかに転がってるんだろうよ。

ぼくたちみんな、ファットを釣って神学論争に持ち込むのを楽しんだ。あいつはいつも怒って、ぼくたちがこの問題について言うことがどうでもよくはないんだ この問題そのものがどうでもよくはないんだ という立場を取りたがったから。この頃には、あいつはもう完全にイカレきってた。みんな議論の皮切りに、さりげない一言を発しては喜んでいた。「おい今日、高速道路で紙様にスピード違反の切符を切られちゃったぜ」とかなんとか。ファットはすぐに畏にはまって、反撃に出る。みんなこうやって、ファットをちんけな形で拷問にかけつつ、楽しく暇をつぶしたもんだ。あいつの家から帰るときにも、これをすべてあいつが日誌に書いているのがわかるから、それがおまけの楽しみにもなった。もちろんその日誌の中では、ファットの意見がいつも勝つ。

ファットをつまらない質問で釣るまでもなかった。たとえば「紙が全能なら、自分で飛び越せないほど広い溝は創れるの？」とか。ファットに答えが出せない本物の問題はいく

らでもあった。友人ケヴィンは、いつも同じやり方で攻撃を開始した*。「おれの死んだネコはどうなんだよ？」とケヴィンは尋ねる。数年前、ケヴィンは夕方に外でネコを散歩させてた。ケヴィンはバカだからネコをヒモでつないでなくて、ネコは通りに駆けだして通りすがりの車の真ん前に飛び出した。ネコの残骸をケヴィンが拾い上げたときにはまだ生きていて、血まみれの泡をふきながら、ケヴィンを恐怖に満ちた目つきで眺めていた。ケヴィンはよく言ったもんだ。「最後の審判の日、大審問官の前に連れ出されたらこうやってやるんだ。『ちょっとまったあ！』そして上着の中から、ぼくの死んだネコをさっと取り出す。『こいつはどう説明してくれるんだ？』と聞いてやる」ケヴィンに言わせると、その頃にはネコはフライパン並に硬直してるはずだ。だからネコを取っ手、つまり尻尾のところで持って掲げ、納得のいく答えを待つんだと。

ファット曰く「どんな答えでも納得しないだろ」

「おまえの出せるような答えならな」とケヴィンはせせら笑った。「そりゃ紙様はおまえの息子の命を救ったかもな。じゃあなぜおれのネコが通りに駆け出すのを五秒遅らせてくれなかったんだ？ 三秒でもいいぜ？ 大した手間じゃないはずだろ。もちろん、どうせネコなんてどうでもいいんだろ」

「なあケヴィン、おまえがネコをつないどけばよかっただけのことだろ」とぼくは一度指摘した。

「いやそうじゃなくて」とファット。「確かに一理ある。おれも気になってたんだ。ケヴィンにとっては、ネコは宇宙について理解できないことすべての象徴なんだ」

ケヴィンはつっけんどんに言った。「理解なら十分してる*。単に宇宙はイカレてると思うだけだよ。紙様は無力か、バカか、どうでもいいと思ってるかだ。あるいはその三つ全部かも。邪悪でまぬけで弱いんだ。おれ、自分でも釈義を始めようっと」

「でも紙様はおまえには語りかけない」とぼく。

「ホースにだってだれが語りかけてるのやらわかりゃしないだろ。真夜中にホースに語りかけるなんて？ 惑星バカの住民かよ。ホース、知恵の紙の名前ってなんだっけ？ 聖ナントカって言ったっけ」

「ハギア・ソフィア」ホースは用心深く言った。

ケヴィンは言った。「ハギア・バカってどう言えばいい？ 聖バカって？」

「ハギア・モロン」とホース。あいつはいつも「負けることで自衛した。「モロンはハギアと同じくギリシャ語だ。オクシモロンの綴りを調べてたときに出くわしたんだ」

「ただし接尾辞-on は neuter ending だ」

これを見ると、ぼくたちの神学談義がおおむねどんなオチになったかは見当がつくだろう。ろくに知識もない連中がいがみあってるわけだ。あと、我らがローマカトリックの友

人デヴィッドと、ガンで死にかけてた女の子シェリーもいた。彼女は緩解して、病院から出されたのだった。彼女の視力や聴力は、ある程度は永続的に障害を残してはいたけれど、それ以外は健康体に見えた。

ファットはもちろん、これを紙様とその癒す愛の証拠として使い、デヴィッドや当然ながら当のシェリーもこれに同調した。ケヴィンは彼女の緩解を、放射線治療と化学治療の奇跡とツキのせいだと見ていた。それと、あの緩解は一時的なんだよ、とかれはこっそり言っていた。いつ何時、また状態が悪くなりかねない。ケヴィンは、次に彼女が悪化したら、もう次の緩解はないよ、と暗く匂わせた。ときどき、ケヴィンは本気でそうなることを願ってるんじゃないか、と思うこともあった。そうすればかれの宇宙の見方が証明されるからだ。

ケヴィンの口先の小技集の中では、宇宙が悲惨と敵意でできていて、いずれはみんなとちめられるのだ、というのが基本線だった。かれが宇宙を見る見方は、ほとんどの人が未払いの請求書を見るような見方だった。いずれ支払わされることになるんだ、と。宇宙は人の釣り糸を繰り出して、こっちがはね回って飛び上がったりさせて、それから釣り糸を巻き込む。ケヴィンはずっと、これが自分で始まるのを待っていた。ぼくについても、デヴィッドについても、そして特にシェリーについて。ホースラヴァー・ファットとなると、ケヴィンはもう釣り糸が何年も繰り出されてないと信じていた。ファットはずいぶん前から、糸をたぐりこむ段階に入ってた*3。かれに言わせると、ファットは潜在的に呪われているどころか、実際にいま呪われているのだった。

ファットはケヴィンの前でグロリア・クヌードソンの話をしないだけの知恵はあった。もししてたらケヴィンは彼女を自分の死んだネコに追加しただろう。最後の審判の日に、ネコといっしょに彼女を上着の中からサッと取り出すとか言い始めるだろう。

カソリックだったデヴィッドは、まちがったことはすべて人間の自由意志に還元した。これにはぼくですら頭にきた。いちどやつに、シェリーがガンになったのも自由意志の一例なのかと聞いてやった。デヴィッドが心理学の最新のニュースを追いかけているのを知っていたから、シェリーが無意識のうちにガンになりたがっていて自分の免疫系を停止させたんだと主張することは百も承知だった。これは先進の心理学業界に漂ってる見方の一つだった。もちろんデヴィッドはしっかり畏にはまってその通りのことを言った。「じゃあなぜ改善したんだよ。無意識のうちによくなりたかったわけ？」とぼく。デヴィッドは困惑した様子だった。病気を彼女自身の意志のせいにするんなら、その緩解だってつまらないもののせいにするしかなくて、超自然のせいにはできない。紙様は何の役目も果たさない。

*3 訳注：大瀧はこころへんが釣りの比喩だということがまったく読めていない。

「C・S・ルイスならこう言ったと思うんだけど」とデヴィッドが切り出し、その場にいたファットはすぐに腹をたてた。デヴィッドが自分の何のひねりもない正統教義を擁護するためにC・S・ルイスを引き合いに出すと、あいつはむかつくのだ。「シェリーは紙様を乗り越えたのかもな。紙様は彼女を病気にしたかったけれど、シェリーはそれと戦ってよくなった」。デヴィッドが出そうとしていた議論はもちろん、シェリーは頭をやられたせいで神経症からガンになったけれど紙様が介入して彼女を助けた、というものだ。ぼくはそれを予測してひっくり返したのだ。

ファットが言った。「いいや。その反対だよ。紙様がおれを治したときみたいに」

幸運なことに、ケヴィンはその場にいなかった。ケヴィンはファットが治ったとは思っていなかった（だれも治ったなんて思ってなかった）し、そのみちそれをやったのは紙様じゃないと思っていた。ちなみに、これはフロイトの攻撃している論理だ。二重の命題が自分を打ち消し合う構造。フロイトはこの構造は合理化をしているしだと考えた。だれかが馬を盗んだと責められると、そいつがこう答える：「おれは馬なんか盗まないし、どうせおまえの馬なんかクズだろう」。この理由づけをよく考えてみたら、その背後にある実際の思考プロセスがわかる。二番目の議論は、最初の議論を強化していない。強化しているかのように見えるだけだ。ぼくたちの永遠に続く神学論議　ファットの聖なるものとの遭遇と称するものが引き金だ　においては、この二命題自己打ち消し構造は、こんな感じになる*：

1. 紙様は存在しない。
2. どのみち紙様なんてアホだ。

ケヴィンの皮肉っぽい声高な議論をよく見てやると、いたるところにこの構造が見られる。デヴィッドは絶えずC・S・ルイスを引用する。ケヴィンは紙様を貶めようと熱心なあまり、論理的な矛盾におちいつている。ファットはピンクの光線が頭に放った情報について、得体のしれない言及をしている。死ぬほど苦しんだシェリーは、敬虔にぶつぶつと言い散らすばかり。ぼくは、そのときだれを相手にしゃべってるかによって、立場をころころ変えた。だれ一人として状況をきちんと把握してなかったけれど、でもみんなそうやって無駄にできる時間はたっぷりあったのだ。いまやドラッグをキめる時代は終わって、みんな新しいオブセッションの対象を求めてうろろうろしていた。ぼくたちにとっての新しいオブセッションは、ファットのおかげで神学だった。

ファットの大好きな古代の引用はこんな具合だ：

「そして偉大なるエホバは眠ると思っいいのだろうか
シエモシュやその他名高き神々のように？」

ああ、いや！ 天はわたしの考えを聞いてそれを書きつけた
そうにちがいない」

ファットはこの残りを引用したがない。

「これがわたしの頭を悩ませて
胸に幾千もの痛みを流し込み
狂気に押しやるのだ……」

これはヘンデルのアリアからだ。ファットとぼくは、セラフィム版のLPでリチャード・ルイスが歌うのを聞いたもんだ。『深く、さらに深く』

一度ファットに、同じレコードの別のアリアがあいつの精神状態を完璧に表現しているよ、と告げた。

「どのアリア？」ファットは用心深げに言った。

「『皆既日食』」とぼく。

「皆既日食！ 太陽もなく、月もなく
すべて真昼のさなかに暗く！
ああ輝かしき光！ 歓迎すべき昼日で
我が目を楽しませるざわめく光線もなし！
なぜこのように、汝の主たる神意を奪うのか？
太陽も月も星々もわたしには暗く見える！」

これに対してファットはこう言った。「おれの場合は正反対だな。おれは別世界から投射された聖なる光によって啓蒙されたんだ。おれには他の誰にも見えないものが見える」
確かに一理あった*。

第3章

ドラッグの10年期でぼくたちが対応を学ばなきゃいけない問題があつて、それは「おまえの脳はいかれちゃってるよ」というニュースをどうやってそいつに告げればいいのか、ということだ。この問題は、ホースラヴァー・ファットの神学世界においても、ぼくたち かれの友人たち が実地に対処すべき問題として入り込んできていた。

ファットの場合、両者を結びつけるのは簡単だ。あいつが1960年代にやったヤクが、1970年代に至るまで脳をおしゃかにしちまった、というわけ。つじつまを合わせてこういう具合に考えられるもんなら、ぼくだってそうしてただろう。ぼくはいろんな問題に同時に答えられるような解決策が好きなのだ。でも、本当にそういうふうには考えられなかった。ファットは幻覚剤はやってなかった。少なくとも本格的には。一度、1964年に、サンドス社のLSD-25がまだ買えた頃 特にパークレーでは簡単に買えた ファットは一度に大量に飲んで*¹、抑圧を解除されて時間をさかのぼったか時間を前に進んだか、上に上がって時間の外に飛び出したかした。とにかくラテン語でしゃべりはじめて、Dies Irae、怒りの日がやってきたと思いこんだ。紙様が、激怒してすさまじい音で足を踏みならしているのが聞こえた。8時間にわたり、ファットはラテン語で祈っては泣き言を言っていた。後にあいつは、そのトリップの間は考えるのもしゃべるのもラテン語でしかできなかった、と主張した。ラテン語の引用句集を見つけて、ふつうに英語を読むのと同じくらいすらすら読めたそう。ま、後の紙様キチガイぶりの原因がそこにあるのかも。あいつの脳は1964年にLSDのトリップが気に入ったので、それを録画して、将来の再生用にとっておいたのかも*。

一方で、こういう理由づけは問題を1964年に遡らせるだけだ。ぼくの知る限り、ラテン語で読んだり考えたり話したりする能力は、LSDのトリップとしては普通じゃない。ファットはラテン語なんか知らない。いまも話せない。サンドスLSD-25を大量に飲む前にも話せなかった。後に宗教体験が始まったとき、あいつは気がつくとも自分でも理解できない外国語で考えていた(1964年には、自分の考えてるラテン語はわかった)。音だけ

*¹ 訳注：LSDは静脈注射なんかしないのだよ、大瀧さん。

で、かれはいくつか手当たり次第に記憶しておいたそのことばを書き留めておいた。あいつにとって、それはぜんぜん言語じゃなくて、だから書いたものはだれにも見せたがらなかった。あいつの奥さん 後の奥さんベス は大学で一年ギリシャ語を勉強していて、ファットが不正確に書き留めたものをコイネギリシャ語だと気がついた。少なくとも、何かギリシャ語の一種、アッティカ方言かコイネかだ*2。

ギリシャ語の「コイネ」というのは、単に「共通」という意味だ。新約聖書の時代には、コイネは中東の共通標準語になって、それ以前にアッカド語にとって変わる存在となっていたアラム語の地位を奪った（ぼくがこういうことを知っているのは、ぼくが専門の作家で、だから言語について学問的知識を持っていることが重要だからだ）。新約聖書の手稿はコイネ・ギリシャ語で書かれて生き延びた。とはいえ共観福音書のもとになった Q 資料は、たぶんアラム語で書かれていただろうけど。アラム語は実際にはヘブライ語の一種で、イエスはアラム語をしゃべった。だからホースラヴァー・ファットがコイネ・ギリシャ語で考え出したというとき、あいつは聖ルカや聖パウロ 二人は親友だった が使った、少なくとも書いた言語で考えていたわけだ。コイネは書かれると変に見える。記述で単語の間にスペースがないからだ。これはいろいろ独特な翻訳を生み出すことになる。翻訳者は自分が適正だと思ったところ、いやそれどころか、もう好き勝手なところに空白を入れられるからだ。たとえばこんな英語を考えてほしい：

GOD IS NO WHERE

GOD IS NOW HERE

実はこういう問題を教えてくれたのはベスだった、ベスはそれまでファットの宗教体験なんか真に受けてなかったのだけれど、でもファットがまったく触れたこともなく、まともな言語だということもわからなかったコイネの単語を表音的に書くのを見てそれが変わった。ファットの主張によれば いや、ファットはやたらにあれこれ主張したから、「ファットの主張によれば」と文を書き出すのはやめないと。あいつが釈義をがんばって書いていた年月 文字通り何年も！* の間に、ファットは宇宙の星の数よりも多くの理論を思いついたはずだ。毎日あいつは新しい理論を開発させた。前よりさらに狡猾

*2 訳注：当然ながら読者はここで、たかが単語をいくつか音だけ意味もわからずに記録して、それがどっかの言語と似てたからって、かれがその言語を知ってた証拠になんかなんないのだ、ということは理解してくれよ。tako, sakana と書いてあって、おお日本語だ、と思うヤツはバカね。それを見てコイネだとか言ったディックの奥さんはバカだったし、それを真に受けたディックもバカだったわけだ。だから一番普通の説明としては、それはコイネでも何でもなし、ただの無意味なハナモゲラだった、ということなのだ。ディックが本気で書いているのか、それともあからさまな妄言の例としてわざとこういうのを書いているのかは読み手の判断次第だが。ただし、このあたりから狂ったファットに対して冷静なフィル、という構図だったこの小説がだんだんおかしくなって、フィルがファットのあれこれを真に受け始めてくる。これはその狂気の手始めにもなっていることは注意。

で、さらにわくわくさせて、さらにイカした代物を。でも、紙様は相変わらず不変のテーマだった。ファットは紙様への信仰から敢えて離れようとしたけれど、それはかつてぼくが持っていた臆病なイヌが前庭の芝生からびくびく離れようとするのと同じやりかただった。あいつは イヌもファットも まず一步踏みだし、それからもう一步、うまくすれば三步目も踏み出して、そこで尻尾を翻して狂ったようにおなじみの場所に駆け戻る*³。ファットにとって、紙様は自分がツバをつけた領土となっていた。でもヤツにとっては不幸なことに、最初の経験以来、ファットはその領土へ戻る道を見つけられなくなっていた。

紙様を見つけたら、その紙様をずっと自分のものにしてい、というのを強制力のある契約条項にすべきだ。ファットにとって、紙様を見つけたことは（本当に見つけたんだとすればの話だけど）結局のところずいぶんと割にあわない経験となり、絶え間なく喜びの供給が減ってくみたくないもので、アッパーの入った袋の中身みたいにどんどん低く低く沈んでく。紙様ってだれが売ってんの？ ファットは、教会たちは自分の役にたてないのを知っていたけれど、それでもデヴィッドの神父の一人と相談はしてみた*。うまくいかなかった。何もうまくいかなかった。ケヴィンはヤクを勧めた。文学に足をつっこんでるぼくは、十七世紀イギリスのマイナーな形而上詩人を読んだらと勧めた。ヴォーンとかハーバートとか：

「かれは己が家を持っているのを知っているのに、どこにあるかほとんど見当もつかない
かれはそれが遠いという
行き方をすっかり忘れてしまったと」

これはヴォーンの詩「人」からのものだ。ぼくに判断できる限りでは、ファットはこの詩人たちのレベルにまで成長し、そして現代においてはアナクロな存在となってしまった。宇宙はアナクロな存在を消去したがる。しっかりしないと、ファットもそういう目にあうのは見え見えだった。

ファットへの勧めとして、最も有望に思えたものはシェリーが出した。シェリーは相変わらず緩解状態でぼくたちとつるんでたのだった。彼女はファットがかなり落ち込んでるときにこう告げた。「あなた、T-34の特徴を研究したらいいのよ」

ファットは、T-34って何だ、と尋ねた。実はシェリーは第二次世界大戦中のロシアの偽美についての本を読んだのだった。T-34戦車はソヴィエト連邦を救った存在であり、

*³ 訳注：要するにこのポイントは、ファットは紙様への信仰から離れようとしてちっとも離れられなかった、ということなのだ。大瀧は正反対に訳している。ついでにイヌの行動もまったく誤解している。

つまりは全連合軍を救った　そしてひいてはホースラヴァー・ファットをも救ったわけだ。というのも T-34 がなければ、あいつがしゃべってたのは　英語でもラテン語でもコイネでもなく　ドイツ語だったはずだからだ。

シェリーは説明した。「T-34 はすごく高速に動いたのよ。クルスクではポルシェのエレファント戦車すら破ったくらい。第四パンツァー戦車隊*をどんな目にあわせたか、想像もつかないでしょう」そして彼女は、1943 年のクルスクにおける状況のスケッチを描き始め、数字を挙げていった。ファットをはじめ、ぼくたちは目を丸くした。シェリーにこんな面があるとは知らなかった。「パンツァー戦車隊に対する戦局を打開するには、ズーコフ自身が出てこなきゃならなかったのよ。ヴァツーチンがへまをやらかしたものでね*。ヴァツーチンは後に親ナチのパルチザンに殺されたわ。で、ドイツ軍の持っていたタイガー戦車と、パンツァー戦車をちょっと考えてみてよ」彼女は各種の戦車の写真を見せてくれて、コイネフ将軍がドニエストル川とブルート川を 3 月 26 日までに首尾良く越えた話を熱っぽく語った。

基本的には、シェリーのアイデアはファットの頭を宇宙的なものや抽象的なものから具体的なものに引きずりおろすということだった。そして、第二次大戦中のソ連のでっかい戦車ほどリアルなものはない、という現実的な発想を考案したわけだ。でも彼女の弁舌は、地図と写真もあって完璧だったけれど、あいつにとってはグロリアの墓場の葬式に出る前の晩に『パットン』をボブと観にいったな、ということ思い出させただけだった。もちろんシェリーはかれがそんな映画を観たことなんて知らなかった。

ケヴィンが言った。「おれ、こいつは裁縫の勉強をしたほうがいいと思うな。ミシン持ってないの、シェリー？　使い方を教えてやれよ」

シェリーは、相当な頑固ぶりを示してさらに続けた。「クルスクでの戦車戦は、装甲車両四千台以上が参加したのよ。史上最大の装甲車戦だわ。みんなスターリングラードのことは知ってるのに、クルスクのことはだれも知らないのよね。ソ連の真の勝利は、クルスクで勝ち取ったものだったのに。考えてもごらんなさいよ　」

デヴィッドが割り込んだ。「ケヴィン、ドイツ人たちはそのロシア人たちに死んだネコを見せて、これを説明してみろと言えよよかったのにな」

「それはソ連軍の攻撃をその場でびたりと止めただろうな。ズーコフはいまだにネコの死をなんとかして説明しきろうとしてるだろう」とぼく。

ケヴィンに向かってシェリーはこう言った。「クルスクで善玉が大勝利を収めたことを考えれば、ネコ一匹のことなんて文句言うことじゃないじゃない」

「聖書には、落ちる雀がどうしたとかいう部分があるだろう。そして紙様がそれにもしっかり目を向けているのだ、とかなんとか。そこが紙様のためなところだよ。目が一つ

しかない」

「クルスクの戦いで勝ったのは紙様だったわけ？」とぼくはシェリーに尋ねた。「ロシア人にしてみれば初耳だろうなあ。特に戦車を作って操縦して殺された人たちにしてみれば*」

シェリーは辛抱強く語った。「紙様はあたしたちを道具として使い、それを通じて御業をなすのよ」

ケヴィンは言った。「それじゃあ、ホースの場合、紙様は欠陥道具を持ってるわけだ。それとも、紙様もファットもどっちも欠陥品かね。差し込み式ガソリンタンクをつけたピントを運転する、八十歳のばあさんみたいに**4」

ファットが言った。「ドイツ軍は、ケヴィンの死んだネコを掲げなきゃならなかっただろうな。どんなネコでもいいってわけじゃない。ケヴィンが気にかけてるのは、あの特定のネコだけだもんな」

「あのネコは、第二次大戦中には存在しなかった」とケヴィン。

「おまえ、当時そのネコを想って悲しんだりした？」とファット。

「そんなことできるわけないだろ。あのネコは存在しなかったんだから」とケヴィン。

「じゃあ、あのネコの状態は今と同じだったわけだ」とファット。

「ちがうね」とケヴィン。

「どうちがう？ 当時のネコの非存在と、いまのネコの非存在とどうちがうわけ？」とファット。

「いまじゃケヴィンが死体を持ってる。掲げられるように。ネコの存在はすべてそのためだったんだ。あのネコが生きたのは、神の善良さに対するケヴィンの反駁用の死体となるためだったんだよ」とデヴィッド。

「ケヴィン、おまえのネコはだれが創った？」とファット。

「紙様だ」とケヴィン。

「じゃああなたの理屈だと、紙様は自分自身の善良さに対する反駁材料を自分で創ったわけね」とシェリー。

「紙様はバカなんだ。おれたちはバカな神を持ってる。前にも言ったろう」

シェリーが言った。「ネコの創造ってかなりの技能がいるのかしら？」

「ネコが二匹がればいい。雄と雌と」だがケヴィンは、彼女がどこに話を持って行こうとしているか明らかにわかっていた。「そして」そこでケヴィンはニヤニヤして止まった。「わかったわかった。確かに技能は要るよ、宇宙に目的があると仮定するなら」

*4 訳注：ここで大瀧は、本文の方を端折ってその中身を自分の解説で説明してみせるという変な手口を使っている。

「あなたは目的がないと思うの？」とシェリー。
ためらいつつケヴィンは言った。「生き物には目的がある」
「その目的をこめたのはだあれ？」とシェリー。
「それは　　」ケヴィンはまたためらった。「目的は生き物たち自身だ。生き物とその目的とは不可分だ」
「じゃあ動物は目的の表現なんですよ。じゃあ宇宙には目的があるわけね」
「ごく一部には」
「そして無目的性が目的を生み出す」
ケヴィンはシェリーをにらみつけた。「くそくらえ」

*

ぼくの見たとこ、ファットの狂気を後押しするのに貢献した単一の要因としては、ケヴィンの皮肉な態度が最大のものだった。最大といっても、第一原因がなんだったにしてもそれには劣るだろうけれど。ケヴィンはその第一原因の意図せざる道具となっていて、ファットもそれを見逃さなかった^{*5}。どんな手段でも形でも形相においても、ケヴィンは精神病にかわるまともな代替案を提示しなかった*。かれの皮肉な薄笑いは、死の薄笑いを漂わせていた。まるで勝ち誇った骸骨みたいな薄笑い。ケヴィンは生を打倒するために生きていた。ファットがケヴィンに我慢しているのは驚くべきことだと最初のうちは思ったけれど、後になってその理由が見えてきた。ケヴィンがファットの妄想体系を引き破るたびに　　バカにして冗談のネタにするたびに　　ファットは強さを増した。自分の疾病に対する唯一の対抗薬が嘲笑であるのなら、ファットとしては狂ったままでいたほうが明らかにマシだったのだ*。あれほどイカれてたにしても、ファットにはそれがわかった。実は、ホントのことを言うなら、ケヴィンだってそれがわかってた*。でもどうやらかれは頭にフィードバックループができていて、おかげで攻撃をやめるよりもそれをさらに強化する方向に向かった。かれの失敗がその努力をさらに強化させた。だから攻撃はさらに激しくなって、ファットの強さもさらに増した。まるでギリシャ神話さながら*。

ホースラヴァー・ファットの釈義では、この問題の主題が何度も何度も繰り返し提起されている。ファットは、一筋の不合理性が宇宙全体に浸透していると信じていて、その不合理性がその宇宙の背後にいる紙様だか究極精神だかにまで行き渡ってるのだ。と考えていた。かれはこう書いている：

38. 「精神」は喪失と哀しみのため発狂してしまった。よってわれわれは、宇宙、

^{*5} 訳注：ここで大瀧が第一原因論についてあれこれ知ったかぶりを展開していないのはかなり意外。

つまり「脳」の一部なんだから、部分的に発狂している。

明らかにあいつは、自分自身がグロリアを失ったことを宇宙的な規模にまで拡大投影してみせている。

35. 「精神」はわれわれに語りかけてはおらず、われわれを手段として語っている。その語りがわれわれを通過して、その哀しみが不合理な形でわれわれを満たす。プラトンが気がついたように、世界の魂には一筋の不合理なものがある。

記述 32 番はこれについてもっと述べている。

われわれが「世界」として経験する、変化する情報は、展開する物語だ。その物語はある女の死について語る（強調はぼくがつけた）。この女性は、ずっと昔に死んだけれど、原初の双子の片割れだった。彼女は聖なるシジギイの半分だった。この物語の目的は、彼女とその死を階層することだ。「精神」は彼女を忘れたくない。だから「脳」の推論は彼女の存在の永久記録で構成され、それを読めば、そういうふう理解できるだろう。「脳」が処理する情報のすべて それはわれわれにとっては、物理的な物体の配置と並べ替えとして経験される は、この彼女を保存しようという試みだ。石ころや岩や棒きれやアメーバは、彼女の痕跡なんだ。彼女の存在と外界の記録は、いまや孤独となった苦しむ「精神」によって、現実のいちばん卑しい水準の上に秩序化されている。

これを読んで、ファットが自分のことを書いているのがわからないんなら、あなたは何もわかってない。

一方で、ぼくはファットが完全にイカしてるのを否定してるわけじゃない。かれはグロリアから電話をもらったときに下降をはじめて、その後いつまでもずっと下り坂だった。シェリーとそのガンとはちがって、ファットは緩解を経験しなかった。紙様と出会うのは緩解じゃない。でも、ケヴィンの皮肉な見方がなんと言おうと、それは悪化でもなかった。精神病における紙様との遭遇が、ガンにおける死と同じものだとは言えない。つまり、病気が悪化するプロセスの論理的な結果だとは言えない。専門用語 神学的な専門用語であって、精神分析の専門用語じゃないけど は神性示現だ。神性示現は聖なるものが自分を明かすことだ。それは霊能者がやる何かじゃなくて、聖なるもの 紙様だか紙々だか、高次の力 がやることだ。萌える柴を創ったのはモーゼじゃない。ホレブ山で低いつぶやく声を生み出したのはエリヤじゃない。本物の神性示現を、霊能者のただの幻覚とどうやって区別すればいいだろう？ その声がか何かその人の知らない、知りようのないことを告げるなら、それは本物であって偽物じゃないのかもしれない。ファットはコ

イネ・ギリシャ語なんか知らなかった。これが何かの証明になるだろうか？ あいつは息子の生まれつきの障害について知らなかった。少なくとも意識的には。ひょっとすると無意識的にはほとんどからまりかけたヘルニアについて知っていて、単にそれに直面しただけか。また、かれがコイネを知っていたかもしれない別の仕組みがある。これは系統発生的記憶と関連していて、ユングが記録した経験だ。かれはそれを、集合的無意識とか人種的無意識*と呼んでいる。個体発生　つまり個体　は系統発生　つまり種　を繰り返す。そしてこれが一般的に認められている以上、ここにファットの精神が二千年前に語られていた言語を引っ張り出してきた根拠があるのかもしれない。もし個体としての人間精神に系統発生的な記憶が埋め込まれているのなら、そういうものが見つかる可能性だってある*。でもユングの概念は思いつきでしかない。だれも本当にそれを確認できてはいない。

もし神聖な存在の可能性を認めるのなら、それが自分を明かす能力を持つことも否定できないはずだ。明らかに、「紙様」の名に値するほどの存在または生き物であれば、その程度の能力は楽々と持っているはずだ。本当の問題は（ぼくに言わせると）なぜ神性示現が起こるのかってことじゃなくて、なぜもっと神性示現が起きないのかってことだ。これを説明する鍵となる概念は、*deus absconditus*、隠され、秘匿され、秘密にされた、あるいは未知の紙様だ。なんでか知らないけれど、ユングはこれを悪名高い発想と呼んでいる。でももし紙が存在するのなら、それは *deus absconditus* でしかあり得ない。その珍しい神性示現を例外として。さもなければ、かれはまったく存在しない。この見方のほうが筋が通っているけれど*、でも神性示現は、いかにまれとは言ってもその見方に反するものとなる。一つ絶対的に確認された神性示現があれば、いまの見方は完全に否定される*⁶。

神性示現と思われるモノが、それを受けた人にすごく生々しい印象を与えた、というのはそれが本物だという証明にはぜんぜんならない。あるいは多くの人が集団的にその神性示現を知覚したということだって、何の証明にもならない*（スピノザが仮定したように、宇宙すべては一つの大きな神性示現かもしれないけれど、でもそれを言うなら一方で仏教観念論者が結論づけたように、宇宙はそもそも存在しないかもしれない）。あらゆる神性示現と称するものはすべてインチキかもしれない。なぜならあらゆるものはインチキかもしれないからだ。切手から化石の骸骨から、宇宙のブラックホールにいたるまで。

*⁶ 訳注：大瀧訳はこのところを決定的にまちがっている。大瀧は明らかに、「いまの見方」（原文では the latter）っていうのを「かれ（紙）はまったく存在しない」というのだと思っているみたいだけど、そうじゃない。紙がいるなら隠されてるはずだ、という考え方のほうだ。なぜディックがこっちのほうが筋が通ってると思うのかはさっぱりわからないけど、紙様が隠された存在なら、なぜ神性示現なんてのがあるのか（つまりしっかり隠れてないでわざわざ姿を見せるのか）、ということになる。そんなのがあんなら、紙様は隠れてないことになるから。だから一つでも神性示現が確認されたら、紙が隠れた存在だという説はくずれる、と言っている。大瀧訳は、それがまったく読めていない。お得意の神学談義なのに。

宇宙のすべて　ぼくたちの体験しているもの　が偽物かもしれないという発想をいちばんうまく表現したのはヘラクレイトスだ。かれの発想、というか疑惑を受け入れて、初めて紙様の問題に取り組む準備ができたことになる。

「目や耳から得た証拠を解釈できるためには、理解（ヌース）が必要だ。目に映るものから隠れた真実にたどりつく道筋は、ほとんどの人が知らない言語による発言を翻訳するようなものだ。ヘラクレイトスは（中略）断片 56 で、人は知覚可能なものについての知識という点で『ホメロスと同じくらい幻想の犠牲者なのだ』と言っている。外見から真実にたどりつくには、解釈してナゾナゾの答えを当てることが必要だ（中略）が、これは人間能力の範疇にあることに見えるけれど、でもほとんどの人はそれを決してやらない*。ヘラクレイトスは一般人の愚かさ、一般人の間で知識と称される代物の愚かさを、ものすごい勢いで攻撃している。一般人は、独自の自分だけの世界で眠っている人たちに例えられている」

これはオックスフォード大学の古代哲学講師でオールソウルズ大のフェロー、エドワード・ハッセーが、著書『ソクラテス以前の哲学者たち』で言っていることだ（Charles Scribner's Sons, New York, 1972, pp37-8）。いろいろ読んだ中で、ぼくは　じゃなくてホースラヴァー・ファットは　現実の性質についての洞察としてこれほど重要なものを見たことがなかった。断片 123 で、ヘラクレイトスはこう言う：「物事の性質は、とかく自分を隠したがる」。そして断片 54 ではこう言う：「隠れた構造は、目に見える構造を支配している」。そしてこれにエドワード・ハッセーはこう追記する：「結果として、かれ（ヘラクレイトス）は必然的に（中略）現実がある程度まで『隠されている』ことを認めたとことになる」。だからもし現実ってのが「ある程度まで『隠されている』」なら、「神性示現」は何を意味しているんだろう？　というのも、神性示現というのは紙様による侵入で*、ぼくたちの世界の侵略ともいうべき侵入だけれど、でもぼくたちの世界は単に、見かけのものでしかない。それは単に「目に見える構造」でしかなくて、それは目に見えない「隠れた構造」の支配下にある。ホースラヴァー・ファットは、これを他のすべてにも増して考えて頂きたいと思うのです。というのも、もしヘラクレイトスが正しければ、実は神性示現いがいの現実が存在しなくて、残りは幻影でしかない。となると、ぼくたちの中でただ一人ファットだけが現実を理解しているわけだけど、ファットはグロリアの電話以来、狂ってるのだ。

キチガイ　心理学的に定義したキチガイで、法的な定義じゃないよ　は現実との接触を失っている。ホースラヴァー・ファットはキチガイだ。よってあいつは現実との接触を失ってる。釈義の記述 30 番：

現象界は存在しない。それは「精神」が処理した情報の実体化だ。

35. 「精神」はわれわれに語りかけてはならず、われわれを手段として語っている。その語りがわれわれを通過して、その哀しみが不合理な形でわれわれを満たす。プラトンが気がついたように、世界の魂には一筋の不合理なものがある。

言い換えると、宇宙自身　そしてその背後にある「精神」　は狂っている。だから現実と接触のある人は、定義上、狂気とも接触がある。つまり不合理性によって満たされている。

要するにファットは自分の精神を観察して、それが壊れているのを見つけた。そして、その精神を使って、マクロコスモスと呼ばれる外部の現実を観察した。それもまた壊れていると判断した。ヘルメス哲学者たちがはっきり述べた通り、マクロコスモスとミクロコスモスはお互いを忠実に反映しあう。ファットは、壊れた道具を使って欠陥ある対象を走査してみて、そしてその捜査結果から何もかもがいかれてるという報告を得たわけだ*。

おまけに、そこから出口はなかった。壊れた道具と壊れた対象*とのインターロックは、これまた完璧な中国の指罫となっていた。自分自身の迷路にとらわれたわけだ、ちょうどクレタのミノス王のために迷路を造ってその中に落ち込み、出られなくなったダイダロスのように。たぶんダイダロスはまだそこにいるんだし、ぼくたちもそうなんだ。ぼくたちとホースラヴァー・ファットとの唯一にちがいは、ファットは自分のいる状況がわかっていて、ぼくたちにはわかってないということだ。だからファットは狂っていて、ぼくたちは正常だ。ハッセーの言うように「一般人は、独自の自分だけの世界で眠っている人たちに例えられている」。そしてハッセーならわかっているだろう。かれは古代ギリシャ思想について存命中の最高権威だもの。ただしフランシス・コーンフォードは例外かもしれないけれど。そして、そのコーンフォードは、プラトンが世界の魂には一筋の不合理なものがあると信じていたと言ってる*7。

この迷路から出る未知はない。迷路は人が中を動くにつれて変わる。なぜならその迷路は生きているから。

パルシファル：わたしはほんの少ししか動いていないのに、すでに遠くまで来たようだ。

グルネマンツ：それはだな、息子よ、ここでは時間が空間に変わるのだ。

(風景全体が不明瞭になる。森がさざ波のように消えて粗い岩壁がさざ波のようにあらわれ、それを通じて門が見える。男二人は門を通過する。森はどうなったのだろうか？ 二人の人物は実際には動いていない。どこにも行かなかったのに、いまやもともといたと

*7 原注：『プラトンの宇宙論、プラトンのティマイオス』 Library of Liberal Arts, New York, 1937

ころにはいない。ここでは時間が空間に変わるのだ。ヴァーグナーは『パルシファル』を1845年に書き始めた。死んだのは1873年で、ヘルマン・ミンコフスキーが四次元時空間を提案する(1908)よりはるか前だ。『パルシファル』の材料となる基盤はケルト伝説と、仏陀に関する書かれなかったオペラ『勝利者たち (Die Sieger)』のためのヴァーグナーの仏教研究だ。リヒャルト・ヴァーグナーはどこから時間が空間に変われるなんて考えを持ってきたんだろうか？*8)

そして時間が空間に変われるなら、空間も時間に変われるんだろうか？

ミルチャ・エリアーデ『神話と現実』のある章は「時間は乗り越えられる」と題されている。神話的な儀式や秘蹟*9の基本目的の一つは、時間を乗り越えることだ。ホースラヴァー・ファットは、自分が二千年前に使われたことば、聖パウロが書いた言語で考えているのに気がついた。ここでは時間が空間に変わるのだ。ファットは、紙様との遭遇の別の特徴を話してくれた。突然1974年のアメリカ合州国カリフォルニアの風景がさざ波のように消えて、1世紀CEのローマの風景がさざ波のように現れたんだそうな。あいつはその両者が重なり合っているのをしばらく体験した。まるで映画でよく使われる技法みたいだ。あるいは写真とかで。なぜ？ どうやって？ 紙様はいろんなことをファットに説明してくれたけれど、でもこれは説明してくれなくて、単にこんな謎めいた発言をただけだった。それが日誌の記述3だ：「3. かれは物事の見かけを変えることで時間が過ぎたように見せかける。」「かれ」ってだれ？ つまり時間は実際には経過していないと解釈すべきなの？ そして本当に経過していないの？ かつては本当の時間があって、それを言うなら本当の世界もあって、それがいまや偽物の時間と偽物の世界があって、それが一種のあぶくみたいにふくれて見かけは変わるけれど、でも実際には前のままってこと？

ホースラヴァー・ファットは、この発言を日誌だか釈義だかあいつが何とでも読んでいるものに挙げるにふさわしいと考えた。日誌の記述4、つまり次の記述はこんな具合：

「精神」の前には物質は可変だ。

外には少しでも世界があるんだろうか？ 本人たちを含めだれにとっても、グルネマンツとパルシファルはじっと立っているのに、風景は変わる。そして二人は別の空間にいることになる。それまで時間として体験されていた空間に。ファットは二千年前の言語で

*8 訳注：フィル・ディックくん、何を寝言言ってるの？ ウェルズ『タイムマシン』(1895)の冒頭を読むと、時間が3次元の次の4次元目だから時間を空間と同じように移動できるという発想はこの時点でかなりポピュラーだったことがわかるし、時間の経過を人が道を歩くのになぞらえるようなレベルでの時空の交換可能性の発想は昔からあるのよ。

*9 訳注：ここに大瀧は、キリスト教での秘蹟のいろんな訳語について得意げにあれこれ解説をつけているけれど、エリアーデは別にキリスト教だけの話をしてるわけじゃないんだから、キリスト教の内輪争いについて知ったかぶりされたって何の意味もないんですけど。

思考し、その言語にふさわしい古代世界を見た。精神の内なる中身が、あいつの外界の知覚とマッチしたわけだ。ここにはなにやら論理性があるようだ。時間の機能不全が起こったのかも。でもなぜあいつの奥さんのベスもそれを体験しなかった？ 聖なるモノとあいつが遭遇したときに、ベスはあいつと一緒に住んでいた。彼女にとっては何も変わらなかったけれど、ただ（語ってくれたところでは）変なポンツという音が聞こえたそうだ。何かを詰め込みすぎたみたいに。何かが発火するところにまで追いつめられ、まるで詰まって、あまりに大量のエネルギーで詰まったみたいに。

ファットと奥さんの二人とも、1974年3月当時の別の一面を語ってくれた。ペットの動物たちが特異な変身をとげたんだそうだ。動物たちはもっと知的でもっと平和に見えた。二ひきとも巨大な悪性腫瘍で死ぬまでの話だけれど。

ファットと奥さんの二人とも、そのペットたちについてあることを語ってくれて、それが以来ずっとぼくの心にわだかまってる。その当時、動物たちは二人とコミュニケーションを取ろうとしているかのようで、言葉をしゃべろうとしていたという。これはファットの精神病の一部として無視するわけにはいかない。これと、動物の死とは。

ファットによれば、最初におかしくなったのはラジオと関係があった。ある晩それを聞いていると、長いこと眠れない夜が続いていたので、ラジオが忌まわしいことばや文章、言っているはずのないことを言っているのをきいた。ベスは寝ていたのでそれを聞かなかった。だからこれはファットの精神が崩壊しているところだったのかもしれない。その頃には、あいつの心はすさまじい速度で瓦解しつつあった。

精神病は笑い事じゃない。

第4章

錠剤とカミソリと車のエンジンとを使った刮目すべき自殺の試みの後で（これはすべてベスが息子のクリストファーを連れてかれを捨てたせいだ）、気がつくとなつとファットはオレンジ郡精神病院に閉じこめられていた。武装警官が、あいつを車いすに乗せて心臓集中治療病棟から地下通路を通り、連結した精神医学病棟まで押してきたのだ。

ファットはこれまで収監されたことがなかった。ジギタリス 49 錠のせいで、あいつは数日にわたる PAT 不整脈を生じていた。というのも、あいつのやらかしたことのおかげで、三度という最大ジギトキシン性が記録されていたからだ。ジギタリスは遺伝性の PAT 不整脈に対するものとして処方されていたけれど、それはジギトキシン中毒の期間中に体験したものとは比べものにならなかった。ジギタリスの過剰摂取が、まさにそれが防ぐはずの不整脈を引き起こすというのは皮肉なものだ。あるとき、ファットが仰向けになって頭上の CRT 画面を見ていると、まっすぐな直線があらわれた。心臓の鼓動が止まったのだ。そのまま眺め続けると、やっと鼓動を追跡するドットがもとの波形に戻った。紙の慈悲は果てしない。

というわけで、この衰弱した状態で、あいつは武装警備の中を精神病棟の監禁下におかれることとなった。そこであいつはまもなく、廊下にすわって莫大なタバコの煙を吸い込み、疲労と恐怖でがたがた震えるようになっていた。その晩、あいつは簡易寝台で眠った一部屋に簡易寝台 6 台だ。そして自分の簡易寝台には革製の手足拘束具がついているのを見つけた。ドアは廊下に向かって開けっ放しで、精神療法士たちが患者を見張るようになっていた。ファットはつけっぱなしの共同テレビを見られた。ジョニー・カーソンのゲストは、たまたまサミー・デイヴィス・ジュニアだった。ファットは、片目がガラスの義眼だとどんな気分だろうと思いつつ眺めた。その時点であいつは、自分がどんな状況におかれているか見当がついていなかった。自分がジギトキシン中毒からは脱したことはわかっていた。どう考えても、自殺しようとしたせいで保護監察下におかれているのもわかった。心臓集中治療病棟に横たわっていたときにベスが何をしていたかは、まったく知らなかった。電話もしないし見舞いにもこない。最初にシェリーがきて、次にデヴィッド。他にはだれも知らない。ファットは特にケヴィンには報せたくなかった。ケヴィンが

顔を出したら自分を　ファットを　ダシにして皮肉を言うだろうから。そしてあいつは皮肉を受け止められる状態じゃなかった。それが善意のものであっても。

オレンジ郡医療センターの主任心臓医は、カリフォルニア大学アーヴァイン校の医学生の大集団にファットを見せた。OCMCは教育用病院でもあった。みんな、高純度ジギタリス49錠の重荷の下で頑張っている心臓の音を聞きたがった。

また、左手首を切って血も失っていた。あいつの命を救ったものは、最初は車のチョークにおける欠陥に端を発していた。暖機してもチョークがきちんと開かず、やがてエンジンが停まった。ファットはよろよろと家に戻ると、ベッドに横たわって死を待った。翌朝、まだ生きてままだ目を覚まし、ジギタリスを吐いてしまった。これがあいつの命を救った二番目のもの。第三のものは、救急医療士の大群がファットの家裏手のガラスとアルミサッシを外して入ってきたことだった。ファットはどこかの時点で薬局に電話して、リブリウム30錠の処方箋分の追加をもらおうとしたのだった。かれはジギタリスを飲む直前に、リブリウム30錠を飲んでいて、薬剤師が救急医療士たちに連絡した。紙の無限の慈悲についてはあれこれ言えるのだけれど、でもなんだかんだ言いつつ、よい薬剤師の才覚のほうはずっと価値がある*。

郡の医療病院の、精神科棟の受け入れ病棟で一晩過ごしてから、ファットは所定の精神鑑定を受けた。身なりのいい男女の大群がファットに直面した。それぞれがクリップボードを持って、みんなファットをじろじろと検分している。

ファットはできる限り上手に、正気のふりをした。連中に、自分が正気を取り戻したと納得させるべくなんでもやった。しゃべりながら、だれも自分を信じてくれないのに気がついた。モノローグをスワヒリ語でやったところで、効果には何のちがいもなかっただろう。ファットがやったことといえば、卑屈になって、最後に残った尊厳すら自分ではぎとってしまっただけだった。自分の一生懸命の努力によって、自尊心を振り捨ててしまったのだ。これまた中国の指罫だ。

ちくしょうめ、とファットはやっと自分につぶやいて、しゃべるのをやめた。

「外に出てください。決定は後でお伝えしますから」と心療技師の一人が言った。

ファットはたちあがって部屋を出ながらもしゃべった。「おれ、ホントによくわかったんですよ。自殺するのは、本来自分にフラストレーションを与えた相手に向かって、外向的に発揮されるべき怒りを内面に注入しちゃうということです。心臓集中治療室だか病棟だかにいるとき、瞑想する時間がたっぷりあったもんで、長年の自己放棄と自己否定がある破壊的な行動となって表現されたんだってことがわかったんですよ。でもいちばん驚いたのが、自分の肉体がおれ自身の精神から自衛すべきだってことを知っていたのみならず、その具体的な自衛手段まで知ってたってことです*。いまやオレは、イエイツの言っ

た『わたしは死にゆく動物の肉体に縛られた不滅の魂である』ってのが、人間の状態における実際の物事の状況とまるっきり正反対だってことがわかったんです*1」

心療技師はこう言った。「決定を下してから、外でお話しますので」

ファットは言った。「息子に会いたいんです」

だれもファットを見なかった。

「ベスがクリストファーを虐待するんじゃないかと思ったんです*2。」とファット。部屋に入ってきて以来、これが初めての正直な発言だった。自殺しようとしたのは、ベスに捨てられたからじゃなくて、ベスがよそに住んでたら小さな息子の面倒をみてやれないからだ。

すぐにファットは外の廊下で、ビニールとクロームの長椅子に座り、夫が寝室のドアの下から毒ガスを注入して自分を殺そうとたくらんだんだと語る太ったおばあさんの話に耳を傾けていた。ファットは自分の人生を振り返ってみた。自分の見た紙のことは考えなかった。おれは実際に紙様を見た数少ない人間の一人なんだぞ、とはつぶやかなかった。かわりに、あの小さな粘土の壺を作ってくれたステファニーのことを思い返した。その壺は中国の壺みたいに思えたので、ファットはそれをオー・ホーと呼んでいた。今頃ステファニーは、ヘロイン中毒になったか、自分が幽閉されているように牢屋に閉じこめられてるか、死んだか、結婚したか、それともよく話していたみたいにワシントンで雪の中で暮らしているか、見たこともないけれど夢見ていたワシントン州にいるだろうか。そのすべてか、あるいはどれでもないかも。自動車事故で大けがをしたかも。いまのオレに会ったら、ステファニーは何というかな、とファットは考えた。閉じこめられ、女房と子供には逃げられ、車のチョークも効かず、頭もいかれてるこんなオレをみたら。

頭がいかれてなかったら、あいつはたぶん自分が生き延びているのがなんて幸運だったかを考えたはずだ　幸運って、哲学的な意味じゃなくて、統計的な意味での話だ。高質純粋ジギタリス 49 錠で生き延びるヤツなんかどこにいる。一般に、処方量の倍のジギタリスである世行きだ。ファットの処方量は決まっていた q.i.d: 一日 4 錠だ。あいつは日量処方量の 12.25 倍を飲み込んで生き延びた。紙様の無限の慈悲は、実用的な配慮という点からすればまるっきり筋が通らない*。それに加えて、あいつは手持ちのリブリウムを全部、クワイド 20 錠、アプレソリン 60 錠、おまけにワインをボトル二本空けている。手持ちの薬物で残ってるのは、マイルス・ナーヴァインのびんが一つだけ。ファットは実質

*1 訳注：ここも大瀧の訳は正反対。ここでファットは、自分が正気であることを強調したかったので、イエイツのこの引用がまちがってると言いたいのだ。その前の話だって、肉体のほうが精神よりえらいって話をしてるでしょう。ところが大瀧は「イエイツのいったこともいまではよくわかります」なんつー訳をつけている。わかっちゃいけないの！ キチガイだと思われるでしょうに！

*2 訳注：大瀧の訳は時制が実にいい加減。大瀧訳ではここは現在形になっている。でもこの発言の主眼は、自殺した当時そう思ったということなので、過去形が必須。

的に死んでた。

精神的にも、あいつは死んでた。

あいつは紙様に会うのが早すぎたのか遅すぎたのか。いずれにしても、生存の面ではファットにとって何ら役にたたなかった。生ける紙様に会っても、通常の忍耐量を要求する仕事をこなすだけの力を身につける役にはまるで立たなかった。その程度の力は、これほど紙様にえこひいきされていない一般人が楽に対処できる程度のものなのに。

でも、ファットが紙様を見る以外のことを達成したんだ、ということも指摘できる。そしてケヴィンは実際にその指摘をやった。ある日、ケヴィンは興奮して電話をかけてきて、ミルチャ・エリアーデの本をまた手に入れたという。

「聞けよ！ エリアーデが、オーストラリアのブッシュマンたちのドリームタイムについて、何て言ってると思う？ 人類学者たちはドリームタイムが過去の時間だと想定しているけれど、それはまちがってるって言うんだ！ エリアーデによれば、それはいままさに起きている別種の時間で、ブッシュマンたちはそれを突破してそこに入り込む。それはブッシュマンの英雄たちとその英雄行為の時代なんだって。待ってる。そこんとこ読んでやるから」しばらく間があった。そしてケヴィンは言った。「ええいクソッ、見つからないや。でも連中がドリームタイムに入る準備のやり方ってのは、おそろしい苦痛を体験することなんだって。それがイニシエーション儀式なんだ。おまえもその体験をしたときにずいぶん苦しんだよな。あの抜けない親知らずがあったし、あと」電話口でケヴィンは声をひそめた。それまでは怒鳴っていたのだ。「ほら、あれだよ、おまえ、当局にかまるのを怖がってただろ」

「オレもどうかしてたよ。連中はオレなんか眼中になかった」とファットは答えた。

「でもおまえはあると思ってて、それでおびえすぎて夜も眠れなかった。それも毎晩。そして感覚遮断を体験した」

「まあ、っていうか、眠れなくてベッドに寝ころんでただけど」

「色を見始めたよな、浮かぶ色を」ケヴィンはまた興奮して怒鳴り始めた。皮肉っぽいのが消えると、ケヴィンは偏執狂になる。「これは『チベット死者の書』に書いてあるんだよ。それは次の世界へと横切るたびなんだ。おまえ、精神的に死にかけてたんだよ！ ストレスと恐怖のせいだ！ でもそれがやりかたなんだ 次の現実に手を伸ばすための！ ドリームタイムへ行くための！」

いまこの瞬間、ファットはビニールとクロームの長いすに座って、精神的に死につつあって、そして今出てきた部屋では専門家たちがあいつの運命を決めてるところで、あいつの残骸に対して判決と審判を下している。キチガイへの審判を、技術的な資格を持った非キチガイがすわって下すのは適正なこと。それ以外に考えられますまい。

ケヴィンは叫んだ。「もし連中がドリームタイムにたどりつけさえすれば！ それこそが唯一の本物の時間なんだ。本物の出来事はすべてドリームタイムで起きる！ それは神々の行動なんだ！」

ファットの横で、巨大なおばあさんは、プラスチックの洗面器を手に捧げている。何時間も、このお婆さんは無理矢理のまされたソラジンをつこうとしていた。ファットにがらがら声で話してくれたところでは、そのソラジンには毒が盛られていると思われるのだから。お婆さんの夫が 各種の偽名を使って病院職員のトップレベルにまで潜入している自分の殺害を完了させようとしているのだそう。

「おまえは、上なる領域に入り込んだわけだ。日誌にだってそう書いたんだろ？」とケヴィンは宣言した。

48. 二つの領域がある。上と下だ。上の領域は超宇宙 I または陽、パルメニデスの第一形態から派生したもので、意識があり、知覚力もある。下の領域、または陰、パルメニデスの第二形態は、機械的であり、盲目的で高効率な原因で動き、決定論的で知性をもたない。それは死んだ源から発するものだからだ。古代にはそれは「アストラル決定論」と呼ばれていた。われわれはおおむねこの低い領域にとらわれているけれど、秘蹟を通じて、プラズマテを手段として、解放される。われわれはあまりに封じ込められているので、アストラル決定論が破られるまで、われわれはそれがあることにさえ気がつかない。『帝国は実は終わっていない*3』。

小柄でかわいい、黒髪の女の子が靴を手に持ったまま、静かにファットと巨大なお婆さんの横を通っていた。朝食時に、その子は靴で窓をたたき割ろうとして、それに失敗すると身長 180 センチの黒人診療士を押し倒した。いま、その子は絶対的な平穩の存在感を漂わせている。

「『帝国は実は終わっていない』」とファットは自分に引用した。この一文は、釈義の中に何度も何度も登場していた。あいつの定番になった台詞だ。もともこの一文は、大いなる夢の中で明かされたものだ。その夢の中で、あいつはまた子供となり、ほこりっぽい古本屋で、珍しい古い SF 雑誌、特に『アスタウンディングス』を探している。夢の中で、あいつは棚から棚へと積み上がった無数のボロボロの雑誌をめくり、「帝国は実は終わっていない」という貴重な連載を探している。それを見つけて読めたら、すべてがわかる。それが夢の中の任務だった。

*3 訳注：大瀧の訳はここでも時制を無視してちがう意味にしている。かれの訳は「帝国は終わることがない」。これだと未来の話まで入るでしょう。ちがうんだよ。さっき、ローマ時代と現代が重なってその間がすつとばされた、という話が出てきたでしょう。だからここで言ってるのは、いまのところ終わってない、というだけの話。将来的にも終わらないんならうだうだやってもしょうがないじゃん。

それ以前に、あの二つの世界が重なるのを体験した中間期に、あいつは1974年のアメリカはカリフォルニアを見ただけでなく古代ローマを見て、その重なりの中に、両方の時空連続体に共通するゲシュタルトを見つけた。それは黒い鉄の牢獄だった。夢の中で「帝国」と呼ばれているのもそれだった。あいつにそれがわかったのは、黒い鉄の牢獄を見たときにそれに見覚えがあったからだ。みんなが気がつかないままその中に暮らしている。黒い鉄の牢獄こそがこの世界だった。

だが　そして何のために　その牢獄を作ったのかはわからなかった。でも一ついいことも見て取れた。牢獄は攻撃にさらされていた。キリスト教徒の一段が牢獄に攻撃をかけはじめ、成功していた。そのキリスト教徒は、日曜日に教会にいてお祈りをするような普通のキリスト教徒じゃなくて、薄いグレーのローブを着た秘密の初期キリスト教徒たちだ。秘密の初期キリスト教徒たちは大喜びしていた。

ファットはその狂気の中で、その連中が喜んでいる理由を理解した。今回は、初期の秘密の灰色ローブのキリスト教徒たちは、やられるのではなく、牢獄をやっつける。聖なるドリームタイムでの英雄たちの行為……ブッシュマンたちによれば、本物である唯一の時間での行為。

かつて、安手のSF長編で、ファットは黒い鉄の牢獄の完璧な記述に出くわしたが、その舞台ははるか未来なのだった。だから過去（古代ローマ）を現在（20世紀のカリフォルニア）に重ね、そして『アンドロイドは私のために滝のように泣いた*4』の遠未来の世界をそこに重ねたら、帝国つまり黒い鉄の牢獄が超時間的または時間をまたがる定数項として出てくる。これまで生まれた人物すべては、文字通り牢獄の鉄の壁に囲まれている。みんなその中にいるのに、だれも気がついていない　灰色ローブの秘密キリスト教徒たち以外は。

ということは、初期の秘密キリスト教徒たちも超時間的または時間をまたがる存在、つまりあらゆる時間に存在しているということで、これはファットには理解できないことだった*。初期なのに、現在にも未来にもいるってどういうこと*？　そして連中が現在に存在しているなら、どうしてだれも連中を見られないんだろう。一方で、なぜ自分を含めだれも四方八方から封じ込めている黒い鉄の牢獄の壁が見えないんだろう。どうしてこんな対立する力が見えるような形で浮かび上がるのは、過去と現在と未来がなんとか　理由はなんであれ　重ね合わされたときだけなのか？

ブッシュマンたちのドリームタイムには時間が存在しないのかもしれない。でも時間が存在しなければ、初期の秘密キリスト教徒たちは爆破に成功したばかりの黒い鉄の牢獄か

*4 訳注：大瀧は cry me a river という慣用表現を知らない。涙が川になるほど大量に流れる、という意味だよ。ちなみにこのタイトル、何か連想させるものでしょ。

ら大喜びで撤収中なんてことはあり得ないだろう。そしておよそ紀元 70 年頃の古代ローマでどうやった爆破したんだろう、当時は爆薬は存在しなかったのに？ そしてドリームタイムでは時間が経過しなかつたなら、どうして牢獄は終わったりしたのか？ それでファットは、「パルシファル」の変な一説を思い出した。「それはだな、息子よ、ここでは時間が空間に変わるのだ」。1974 年の 3 月の宗教体験の間、ファットは空間の増大を目撃していた。何キロも何キロもの空間が、ずっと星まで続いている。身の回りの空間が開かれて、閉じこめる箱が取り除かれたかのようなようだった。自動車でのドライブの間、箱の中に入れて運ばれていた雄ネコが、目的地についたので箱から出されて解放されたような気分だった。そして夜に眠ると、あいつは計り知れない虚空を夢見たが、でもその虚空は生きているのだった。その空虚は拡大し、漂い、まったく空っぽのようだったが、それなのに人格を持っていた。その虚空はファットを見て喜びを表明していた。夢の中のファットには肉体がなかった。あいつもその果てしない虚空のように、とっつてもゆっくり漂うだけだった。そしてあいつはそれに加えて、音楽みたいなかすかなハミングを聴き取っていた。どうやら虚空は、このエコー、このハミングを通じて交信するようだ。

「あらゆる人の中であなたが、万人の中であなたこそ、わたしが最も愛する者」とその虚空は伝えてきた。

虚空はこれまで存在したあらゆる人間の中で唯一、ホースラヴァー・ファットと再び結ばれるのを待ち続けてきたのだった。その虚空の愛は、その空間的な広がりと同様に果てしなかった。虚空とその愛は永遠に漂っていた。ファットは生まれてこの方、これほど幸せだったことはなかった。

心療技師がやってきて言った。「あなたを十四日間、収容します」

「家には帰れないんですか？」とファット。

「いいえ。あなたは治療が必要だと思われるので。まだ家に帰れる状態ではありません」

「(拘束するなら)権利を読み上げてくれ」とファットは、無力感と恐怖に襲われて言った。

「われわれは裁判所への申し立てなしで、あなたを 14 日間収容することができます。その後、裁判所から許可があれば^{*5}、必要に応じてさらに 90 日間収容できます」

ここで何か言ったら、一言でも口にしたら、その 90 日間の収容をくろうのはわかってた。だから何も言わなかった。発狂すると、黙ることを覚える。

発狂して、しかもその状態を公の場で見つかってしまうというのは、監獄入りの一つの

^{*5} 訳注：大瀧訳はここに「あなたの同意があれば」という変な一節が入ってる。「あなたはキチガイですから収容します」というのに本人の許可がいるわけじゃない。

方法だったというわけだ。いまではファットもこれを知っている。オレンジ郡はアル中収容所を持っているだけでなく、キチガイ収容所も持っていた。あいつが入れられたのはそこだ。ずいぶん長い滞在になるかもしれない。一方、家では、バスが家にあるもので欲しいものをすべて借りたアパートに運んでいるにちがいない。アパートがどこか、ファットには教えてくれなかった。どの都市かさえも教えてくれなかった。

実は、ファットはその時点では知らなかったことだけれど、己の愚行からファットは家のローン支払いを滞納し、車のローンも滞納していた。電気料金も電話料金も払っていなかった。バスはファットの心身両方の状態で手一杯で、ファットが作り出したすさまじい問題にまで対応しろというのは酷というものだ。だからファットが退院して家に帰ると、差し押さえ通知が貼られ、車は消え、冷蔵庫からは水が漏れ、電話で助けを呼ぼうとしても、電話は恐ろしいまでに沈黙を保った。おかげで、多少なりとも残っていた気力も一掃された。そしてみんな自分が悪いんだとあいつにはわかっていた。これが自分のカルマなんだ、と。

現時点では、ファットはこうしたことを知らなかった。知っていたのは単に、自分が最低でも二週間にわたって監獄に投げ込まれたということだけ。それともう一つ、ほかの患者たちから発見したことがあった。オレンジ郡はこの収監の費用をファットに請求してくる。実際、請求金額は合計で、心臓集中治療病棟で過ごした分の含めて、二千ドル以上になった。そもそもファットが郡の病院にいったのは、私立病院に行けるだけのお金がなかったからだ。というわけで、いまやあいつは発狂することについてもう一つ学んだわけだ。ぶちこまれるのみならず、それはずいぶんお金がかかるのだ、ということだ。やつらはこっちが狂っているということでお金を請求できるし、それを払わなかったり、払えなかったりすれば告訴されるし、判決が出てそれにしたがわなければ、法廷侮辱罪でまたもぶちこまれる。

ファットの最初の自殺未遂が深い絶望から生じたものだということを考えると、現状の魔法というか輝きはなぜか消え失せていた。プラスチックとクロームのベンチにすわったあいつの隣で、あの巨大な老婆は相変わらず自分に与えられた薬を、こういう時のために用意されたプラスチックの流しにはき出そうとしていた。心療技師がファットの腕をつかんで、これから二週間収容されることになる病棟に連れて行った。それは北病棟と呼ばれていた。文句もいわずにファットは心療技師にしたがって受け入れ病棟を出ると、廊下を横切って北病棟に入り。またもや背後でドアに鍵がかけられた。

ちくしょう、とファットはつぶやいた。

*

心療技師はファットを部屋まで案内してくれた。そこには簡易寝台6つではなく、

ベッドが2つあった　そしてファットを小さな部屋に連れて行って質問票に記入させた。「ほんの数分で済みますから」と心療技師は言った。

その小さな部屋には女の子が立っていた。メキシコ人で、がっしりして、粗い褐色の肌と大きな眼をしていた。暗く平和な目、炎をたたえたような目だ。ファットはその娘の燃える穏やかな巨大な目を見て、立ちつくしてしまった。彼女はテレビの上で雑誌を開いて手に持っていた。そのページに描かれている下手な絵を見せていたのだった。『ものみの塔』だ、とファットは気がついた。ほほえみかけている少女はエホバの証人だ。

少女は穏やかな抑制された声で、心療技師ではなくファットにこう言った。「われらが主なる神はわたしたちが苦痛も恐怖もなく暮らせる場所を用意してくださって、見てください、動物たちも一緒に、ライオンと羊が幸せに横たわっています。わたしたちも、わたしたちみんな、お互いを愛する友人たちが、苦しみも氏もなく、永遠にいつまでも神エホバとともに暮らすんです。主エホバはわたしたちを愛し、何をしようとも決してわたしたちを見捨てません」

「デビー、ラウンジから出て行きなさい」と心療技師は言った。

相変わらずファットにほほえみながら、少女はその下手な絵の中のウシと子羊を指さした。「すべての獣、すべての人、大も小もすべての生きとし生けるものたちは、王国の到来とともに、エホバの暖かみに浴するのです。そんなのはずいぶん先の話だともうかもしませんが、キリスト・イエスは今日われわれとともにあるのです」そして少女は雑誌を閉じると、まだほほえみつつも無言で、部屋から出て行った。

「すみませんね」と心療技師はファットに言った。

「すげえ」とファットは驚愕して言った。

「不快になりましたか？　すみませんね。あの子はある文献を持ってはいけないはずなんです。だれかがこっそり持ち込んで渡したんですよ」

ファットは答えた。「だいじょうぶ」。あいつはそれに気がついた。それはあいつをくらさせた。

「じゃあ情報を書き込んでみましょうか」と心療技師は、クリップボードとペンを持ってすわった。「誕生日から」

バカだな、とファットは思った。こいつ、どうしようもないバカだな。紙様がこのろくでもない精神病院にいるのに、それを知らない。見てもわからない。侵入されたのに気がつきさえしない。

あいつは喜びを感じた。

釈義の九項目を思い出した。かれはずっと昔に暮らしていたが、いまなお生きている。いまなお生きている、とファットは思った。あれだけのことが起きたのに。錠剤のあとで

も、手首を切った後でも、車の排気ガスのあとでも。ぶちこまれた後でも。いまなお生きている。

*

数日たって、病棟でいちばん好きな患者はダグだった。大柄で若い、衰えた破瓜病患者で、普通の服を着たことがなく、いつも背中の中をボタンをあけたまま病院のガウンをはおるだけだ。ダグの髪を洗い、切り、ブラシをかけるのは病棟の女性たちだった。ダグはそういうことを自分でやる能力がなかったからだ。ダグは自分の状況を特に深刻には考えていなかったが、毎朝一斉に朝食のために起こされるときは別だった。毎日、ダグはおびえきってファットを迎えた。

ダグは毎朝言うのだった。「テレビラウンジには悪魔がいるよ。あの部屋に入るのはこわいよ。あなたには感じられる？ ぼくは部屋の横を歩いただけで感じるんだ」

みんなが昼食の注文を出すとき、ダグはこう書いた：

残飯

「残飯を頼むんだよ」とダグはファットに言った。

ファットは言った。「オレはゴミを注文しよう」

中央オフィスは、ガラスの壁と鍵のかかったドアがあった。そこから職員は患者たちを観察してメモをとった。ファットの場合、患者たちがトランプをするとき（これは全体の半分くらいの時間を占めていた。何ら治療を受けていなかったからだ）絶対に参加しない、ということが記録されていた。他の患者たちはポーカーやブラックジャックをしているのに、ファットは一人で坐って読書をしている。

「トランプしないんですか？」と心療技師のベニーが尋ねた。

ファットは本をおろして言った。「ポーカーとブラックジャックはトランプゲームというよりお金のゲームだ。ここではお金を持たせてくれないから、ゲームをしても意味がない」

「トランプしたほうがいいと思いますよ」とベニー。

ファットは、これがトランプをやれという命令なのを知っていたから、デビーといっしょに子ども向けのトランプゲームのフィッシュなどをやった。フィッシュを何時間もやった。職員たちはガラスのオフィスから観察し、見たものを記録した。

女性の一人がなんとか自分の聖書を取り上げられずにいた。患者35人にたった一冊の聖書だ。デビーはそれを見てはいけないことになっていた。でも、廊下の角の一つでは

日中は部屋から閉め出されて、横になって寝ないようにさせられていた 職員から死角になっていた。ファットはときどき、かれらの聖書、共有の聖書をデビーに渡して詩

編の一つを素早く読めるようにしてあげた。職員は何が起きているかを知っていて、だから二人を毛嫌いしたけれど、でも心療技師がオフィスから出てきて廊下をやってくる頃には、デビーはさっさとよそに向かっていた。

精神病棟の入院患者たちは常に一定の速度で動き、それ以外の速度を出すことはなかった。でもある者は常にゆっくり動き、ある者は常に走った。デビーは恰幅がよくて頑強だったので、ゆっくりと動いた。ダグもそうだった。ファットはいつもダグといっしょだったので、ダグに速度を合わせた。そうやって二人は一緒にぐるぐると廊下をめぐり、会話した。精神病院での会話はバス待合室の会話に似ている。グレイハウンドのバス待合室ではみんなが待っているし、精神病院では 特に群の監禁精神病院では みんなが待っている。外に出るのを待っている。

神話的な小説がなんと言おうと、精神病棟では大したことは起きない。患者たちが職員を圧倒したりすることはないし、職員が患者たちを殺したりすることもない。ほとんどの人は本を読んだりテレビを見たり、テレビを見たりすわってタバコを吸ったり、長いすに横になって寝ようとしたり、コーヒーを飲んだりトランプしたり歩いたりして、一日三回食事が提供される。時間の経過は食事運搬車の到着でわかる。夜には見舞客がきて、みんないつもほほえんでいる。精神病院の患者たちは、外からの人々がなぜほほえむのかさっぱりわからない。ぼくにとっても、未だに謎のままだ。

^{メディケーション}投薬は、いつも「メド」と呼ばれているけれど、不定期に小さな紙コップ入りで渡される。みんなソラジンと他に何かを与えられる。何をのまされているか教えてくれないし、薬をちゃんと飲み込んでいるか見張っている。ときどきメド担当ナースがへまをして、同じ投薬トレーを二回持ってくる。患者たちはいつも、十分前にメドを飲んだぞと指摘するけれど、ナースたちはとにかくもう一度投薬する。まちがいはその日の終わりまで発覚せず、職員はその件について患者たちには話さない。患者たちはみんな、体内に規定量の倍のソラジンを抱えていることになる。

この二倍投薬が病棟を過剰に静かにしておくための意図的な戦術だと信じている精神病患者には、偏執狂の連中でさえ会ったことがない。ナースたちがバカなのはあからさまなほどはっきりしている。ナースたちは、患者たちを見分けるのにさえ苦労していて、それぞれの患者の紙コップも見つけれない。これは、病棟の人員構成が絶えず変化するからだ。新人がやってきて、古い連中が退院する。精神病棟で本当に危険なのは、PCP^{*6}でぶっ飛んだだれかがまちがって収監されたときだ。多くの精神病院の方針として、PCP使用者は入れず、武装警察に処理させる。武装警察は、いつも PCP 使用者たちを武装していない精神病院の患者や職員に押しつけようとする。だれも PCP 利用者は相手にした

*6 原注：エンゼルダストとも呼ばれる。

くないし、それはもっともなことだ。新聞は絶えず、PCPフリークがどこかの病棟に収容されて、他の人の鼻を食いちぎったり自分の目をえぐりだしたりした話を報道している。

ファットはそういう目にはあわずにすんだ。そんな恐ろしいことがあるとも知らなかった。これは OCMC の賢い計画によるもので、PCP 狂いが北病棟には絶対こないようにしていた。事実問題として、ファットは OCMC に命を負っていた（ついでに二千ドル負っていた）けれど、かれの頭はイカレすぎてこの事実を受け止められずにいた。

ベスが OCMC からの請求明細を見たとき、夫を生かしておくために OCMC がこれほどのことをやったとは信じられないほどだった。明細は五ページにわたっていた。酸素代すら含まれていた。ファットは知らなかったけれど、集中心肺治療病棟のナースたちは、これは助からないと思っていた。絶えず観察していたのだ。集中心肺治療病棟では、ときどき警告サイレンが鳴る。だれかが重要な生命反応を失ったということだ。ファットは、ベッドに横たわってビデオ画面につながれて、鉄道操車場の隣に置かれたような気分だった。生命維持装置がたえず各種の音をたてていた。

精神の病んだ者たちの特徴として、自分を助けてくれる人々を憎み、敵対をたくらむ者たちを愛する。ファットはまだベスを愛し、OCMC を毛嫌いしていた。これはかれが北病棟にいるべきだということを示していた。この点、ぼくはまったく疑念を持っていない。ベスはクリストファーをつれて行方をくらませたとき、ファットが自殺しようとするのを知っていた。カナダでもそうしたからだ。実はベスは、ファットが自殺したらすぐに戻る気でいた。彼女が後で自分からそう言ったのだ。さらに、あいつが自殺に失敗したことで激怒した、とも語った。なぜそんなことで激怒するのか、とファットがきくと、ベスはこう答えた：

「あんた、またもや何もまともにできないことを実証してみせたのよ」

狂気と正気の区別はカミソリの刃よりも細く、犬の歯よりも鋭く、牡鹿よりも身軽だ。一番実体の薄い幽霊よりもとらえどころがない。ひょっとしたら、実在しないのかもしれない。ひょっとしたら、それはまさに幽霊そのものなのかもしれない。

皮肉なことに、ファットが収監病棟に放り込まれたのは、狂っているからではなかった（実際には狂っていたが）。公式な理由は、「自分自身に危害を加える」法のせいだった。ファットは自分自身の福祉に対する危険となっていた。いろんな人に適用できそうな罪状だ。北病棟で暮らしている間、いろんな心理テストを受けさせられた。あいつはそれに合格したが、紙様の話をしないだけの分別は持っていた。すべての私見に合格したけれど、ファットはウソでそれを切り抜けたのだった。時間をつぶすのに、あいつは何度も何度もアレクサンドル・ネフスキーが氷の上に誘い出したドイツの騎士たちの絵を描いた。誘い出されて死を迎えたのだ。ファットは、重い甲冑をまとったチュートン朝の騎士たちに感

情移入した。細いスリット状の目がついた仮面と、左右からはウシの角が突きだしている。それぞれの騎士が巨大な盾と抜き身の剣を持っているところを描いた。盾にファットは「In hoc signo vinces」と書いた。これはタバコの箱に書いてあったのだ。「この紋章のにより汝は征服する」という意味だ。この紋章は鉄十字の形をとっていた。あいつの紙への愛は怒りに変わった。漠然とした怒りだ。クリストファーが草原を駆けている幻覚を見た。小さな青いコートを背後にはためかせて、クリストファーがひたすら走っている。まちががなくそれはホースラヴァー・ファット自身が走っているのだ、少なくともあいつの中の子供が。自分の怒りのように漠然としたものから逃げている。

それに加えてかれは何度かこう書いた：

Dico per spiritum sanctum. Haec veritas est. Mihi crede et mecum in aeternitate vivebis. 記述 28

この意味は「わたしは精霊を手段として語る。これは真実である。信じればおまえはわたしとともに永遠に暮らす」ということだ。

ある日廊下の壁に貼られた印刷命令の一覧に、あいつはこう書いた：

Ex Deo nascimur, in Jesu mortimur, per spiritum sanctum reviviscimus.

どういう意味、とダグがきいた。

「『我々は紙から生まれ、イエスの中に死に、精霊によって復活する』」とファットは翻訳した。

「あんた、ここに九十日いることになるよ」とダグ。

あるときファットは、掲示された通達に魅了された。その通達は、何をしてもいけないかを重要な順に挙げているものだった。一覧のてっぺん近くでは、万人に対して次のように告げられていた：

病棟からはだれも灰皿を持ち出してはいけません。

そして一覧の下の方にはこう述べられていた：

頭葉切除は患者の書面による同意がない限り実施してはいけません。

「これは『前頭葉』が正しいんだ」とダグは言って、「前」を書き加えた。

「なんでそんなこと知ってるの？」とファット。

「知るには二つのやり方がある。知識が感覚器官を通じて得られるのは経験的知識と呼ばれる。知識が脳に湧いてくるのは、先験的知識だ」とダグは言って、通達にこう書いた：

灰皿を返すから、前頭葉を返してくれますか？

「おまえ、九〇日くらいよ」とファット。

建物の外では雨が降り注いだ。ファットが北病棟にきてからずっと雨だった。洗濯室の洗濯機の上に立てば、鉄格子入りの窓から駐車場が見えた。みんな車を止めて、雨の中を入口まで走っていた。ファットは自分が病棟の中の屋内にいてよかったと思った。

この病棟担当のストーン医師がある日問診をした。

「前に自殺しようとしたことはある？」とストーン医師。

「いいえ」とファットは言ったが、もちろんこれはウソだ。その時点ではあいつはもうカナダのことを忘れていた。あいつの印象では、自分の人生はベスが出て行った二週間前に始まったのだった。

「わたしが思うに、自殺しようとしたとき君は初めて現実とふれ合ったんだ」とストーン医師。

「そうかも」とファット。

「これからきみに施すのは、バッチ^{*7}療薬と呼んでいるものだ」ストーン博士はペイチをバッチと発音した。「こういう有機治療薬は、ウェールズに生えるある花から蒸留したものなんだ。バッチ博士はこの世のありとあらゆるネガティブな精神状態を経験しつつ、ウェールズの草原や牧草地をさまよった。体験したそれぞれの状態ごとに、博士は各種の花を次々に手に取って見たんだ。すると正しい花が手の中で震えた。そして博士はそれぞれの花から霊薬の形でエッセンスを抽出する独特の手法を開発し、その花の組み合わせも編み出したんだ。わたしがそれをラム酒をベースに調合してみた」かれは三つのびんをいっしょに机にのせると、もっと大きな空き瓶を見つけて、三つの瓶の中身をそこに空けた。「バッチ療薬が害をおよぼすことは絶対にあり得ない。これは有害な化学物質じゃない。無力感、恐怖、行動不能感を取り除いてくれる。わたしの診断では、きみはその三つの領域に障害を持っている。恐怖、無力感、行動不能。自殺しようとするかわりにきみが何をすべきだったかと言うと、奥さんから子供を引き離すことだった。カリフォルニアの法律では、未成年者は裁判所命令が出るまで父親といるべきなんだから。それからきみは新聞か電話帳でも丸めて、奥さんを軽く叩いてやればよかった^{*8}」

「ありがとうございます」とファットはびんを受け取った。ストーン医師が完全にイカレてるのがわかったけれど、でもいいイカレ方だった。ストーン医師は北病棟で、患者た

^{*7} 訳注：大瀧訳はこれをパチュ療法と書いている。綴りは Bach。パチュという表記の例は見あたらない。ただしネット以前でこれを要求するのは酷か。中身は、花のエキスを飲むと心のゆがみがなおって本来の自然な状態に戻ります、というアロマセラピーにホメオパシーを混ぜたようなインチキニューエージ代替療法。ちなみに後になって、ディック自身がこれを単に患者に口を開かせる方便でしかないインチキ療法と認識していることがわかる。大瀧の注はそれをちゃんと理解しているとは考えにくい。

^{*8} 訳注：ここでも大瀧訳は時制がまったくあっていない。日本語と英語は時間の表現がちがうのでまったく同じである必要はないけれど、過去の話を現在に変えるのは明らかにまちがい。

ち以外ではじめてこちらを人間扱いして会話してくれた人だった。

「内心にずいぶん怒りを抱いてるね。『老子』を貸してあげよう。老子を読んだことは？」

「ありません」とファットは認めた。

「ここんところを読んであげよう」とストーン医師は朗読を始めた。

「その上部は躍動せず
その下部は曖昧ではない。
ほとんど目に見えないそれは名付けられず
そして実体のないものに戻ってくる。
これは形のない形、
実体のないイメージと呼ばれる。
それは不明瞭で茫洋と呼ばれる。
正面から近づいても顔は見えない。
背後から近づいても背中は見えない。」

これを聞いて、ファットは自分の日誌の記述 1 と 2 を思い出した。そしてストーン医師にそれを暗唱してみせた。

1. 一つの「精神」がある。でもその下で二つの原理が争っている。
2. その「精神」は光を招き入れ、それから闇を招き入れる。その相互作用によって時間が生成される。最終的に、「精神」は光の勝利を宣言する。時間は止まり、「精神」は完全となる。

「でも、もし『精神』が光の勝利宣言をして闇が消えるなら、現実も消えるだろう。だって現実は陽と陰が等分に混ざったものだから」

「陽はパルメニデスの形態 I です。陰は形態 II だ。パルメニデスは、形態 II は実は存在しないと論じました。存在するのは形態 I だけ。パルメニデスは一元論的な世界を信じていました。人々は両方の形態があると想像はするんですが、それはまちがいです。アリストテレスは、パルメニデスが形態 I を『存在するもの』と同じだとして、形態 II を『存在しないもの』と同じだとしているのだ、と説明しています。だから人々は幻惑されているんです」

ファットを見つめながらストーン医師は言った。「その出所は？」

「エドワード・ハッセー」とファット。

「オックスフォードの人だね。わたしはオックスフォードに通ったんだ。わたしの見たところ、ハッセーに比肩するほどの人はだれもいない」

「その通りです」とファット。

「もっと話してくれ」とストーン医師。

ファットは言った。「時間は存在しません。これはテュアナのアポロニウスやタルソスのパウロ、魔術師シモン、パラケルスス、ベーメ、ブルーノが知っていた大いなる秘密です。宇宙は自分自身を完成させつつある単一の存在へと収斂しているんです。荒廃と無秩序は、おれたちには逆回して増えているように見えています。おれの釈義 18 番にはこうあります：『実時間は C.E.70 年にエルサレム神殿の崩壊とともに止まった。そして 1974 年にまた動き出した。その間の時期は、「精神」の「創造」を猿まねしているだけの、まったく偽の穴埋めだ』」

「だれが穴埋めしたの？」とストーン医師は尋ねた。

「黒き鉄の牢獄、つまり帝国をあらわすものです。おれに 」ファットは「おれに啓示されたことで」と言いかけたが、ことばを選びなおした^{*9}。発見の中で一番重要だったのはこういうことです：『『帝国は実は終わっていない』』

机によりかかりながら、ストーン医師は腕を組んで前後に身を揺すり、ファットを検分しつつもっと先を聞こうとしていた。

「おれの知ってるのはそれだけです」とファットは、いまさらながら警戒を強めた。

「きみの言うことにはとても興味がある」とストーン医師。

ファットは二つの可能性のうち一つしかないことに気がついた。他の可能性はない。一つの可能性は、ストーン医師が完全にイカレてる ふうのイカレ具合なんかじゃなく、完全にイカレきっている か、あるいは見事な専門家然とした手口で、ファットに口を開かせているのだ。ファットをおびき出して、いまやファットが完全に狂っていると知った。ということは、ファットは出廷と追加の収容九〇日を覚悟すべきだってことになる。

これは気の滅入るような発見だ。

1. 自分に同意するものはイカレてる。
2. 自分に同意しないものが権力を握っている。

この双子状の認識が、いまやファットの頭の中にわき上がっていた。あいつは一か八かで、ストーン医師に釈義の中の最も飛び抜けた記述を披露することにした。

「釈義 24 番」とファット。「『休眠状態の種子の形で、生きた情報として、プラスマテハチェノボスキオンの埋められた文書図書館で紀元一九四五年までまどろんで 』」

^{*9} 訳注：ここも大瀧訳はいい加減。ファットはこの時点では、まだストーン医師を信用していいか自信がないので、自分に啓示が下ったなんてことを言いたくない。だからそれを途中で言いかけて、別の表現に変えた。ところが大瀧訳は、それをあっさり言ってしまうことになっている。

「『チェノボスキオン』とは何だね？」ストーン医師が割り込んだ。

「ナグ・ハマディです」

「ああ、グノーシスの図書館か」とストーン医師はうなずいた。一九四五年に発見され、解読されたが公刊されていない。『生きた情報』だって？」目はファットをつぶさに検分するために見据えられた。「『生きた情報』ね」と繰り返す。そしてこういった。「ロゴスカ」ファットは震撼した。

「うんそうだ」とストーン医師。「ロゴスは生きた情報になる、自己複製もできるし」

ファットは言った。「情報を通じて自己複製するんじゃない。情報の中に自己複製するのではなく、情報として自己複製するんです。イエスがあいまいに『芥子の種』で言っていたのはそういうことです。その種は『鳥たちが巣を作れるほど大きな木へと育つ』とイエスはいいました」

ストーン医師は同意した。「芥子の木なんてない。だからイエスがそれを文字通りの意味で言っていたはずはない。これはマルコ福音書の、通称「秘密性」テーマとも合致する。つまりイエスは部外者に真実を知られたくなかったんだ。そしてきみは真実を知っている？」

「イエスは自分自身の死だけでなく、すべての 」ファットはためらった。「ホモプラスマテたちの死を予見していた。ホモプラスマテというのは、プラスマテが交接した人間です。異種間共生です。生きた情報として、プラスマテは人間の視神経を溯り、松果体にたどりつく。プラスマテは人間の脳を雌の宿主として使い 」

ストーン医師はうめいて、自分自身を強く抱きしめた。

「自分自身を複製して活性形態となる。ヘルメス学の錬金術師たちは、古代の文献からこれを理論的には知っていたものの、再現はできなかった。なぜならかれらは休眠状態の埋まったプラスマテを見つけられなかったからだ」

「だがきみは、プラスマテ ロゴス がナグ・ハマディで発掘されたと言ったな！」

「そうです、文書が読まれたときに」

「休眠種子形態でいたのは、クムラン^{*10}ではないんだな？ 第五洞窟ではなかったんだな？^{*11}」

「うーん」とファットは自信なさげに言った。

「プラテスマはもともとどこからきたんだ？」

ちょっと間をおいてからファットは言った。「別の星系からです」

^{*10} 念のため、ナグ・ハマディは初期キリスト教の変な一派の文書が発見されたところ、クムランは古代ユダヤ教の変な一派の教義を書いた死海文書が見つかったところ。

^{*11} 訳注：ここも大瀧訳だと、プラテスマがクムランに休眠種子状態以外の形で存在した、という意味になっている。ファットは、そもそも存在しなかった、と言っている。

「その星系を名指してはくれまいか？」

「シリウスです」とファット。

「つまり西スーダンのドゴン族がキリスト教の起源だと思うのか^{*12}」

「あの部族は魚の印を使うでしょう。ノンモ、優しき双子を指すのにね」

「それはつまり形態Ⅰか、陰陽の陽だな」

「その通り」とファット。

「そしてユルグが形態Ⅱだ。だがきみは形態Ⅱが存在しないと信じているね」

「ノンモは彼女を斬り殺さなければならなかったんです」

「それはある意味で、日本神話の告げるところでもある」とストーン医師。「かれらの宇宙論的な神話だよ。双子の女性は火を産んで死んでしまう。そして地下に下る。双子の男のほうは、彼女を追って蘇らせようとするが、女は腐敗して怪物を産み落としていた。女は男を追いかけてきたので、男は彼女を地下に封じ込める」

驚嘆してファットは尋ねた。「腐敗しているのに、それでも生き続けてたんですか？」

「怪物ばかりをね」とストーン医師。

*

この頃には、まさにこの会話のおかげで新しい命題が二つファットの脳裏に浮かんでいた。

1. 権力を握っている者の一部はイカレてる。
2. そして彼らは正しい。

「正しい」というのは「現実との接触を保っている」と読んでほしい。ファットは自分の最も陰気な洞察、つまり宇宙とその背後にいて宇宙を統治している「精神」はどちらも完全に不合理的だということだ。これをストーン医師に話すべきかどうか思案した。ストーン医師は、人生で会っただれよりもファットをよく理解してくれているようだ。

「ストーン先生、一つききたいことがあるんですけど。専門家としての意見がほしいんです」

「どうぞ」

^{*12} 訳注：ドゴンがオカルト屋の間に流行ったのは、マルセル・グリオールの調査によるものだが、現在ではかれの報告は（意図的かどうかはわからないが）悪質な誘導尋問による歪曲だというのが定説。ディックはここで、ドゴンの神話だけを問題にしているのだが、大瀧解説は嬉々としてして、ドゴン族がケプラー第一法則を知っているとかいうヨタを垂れ流している。とはいえ、と学会がなかった時代には、これは仕方ないかもしれない。

「宇宙が非理性的だなんてことはあり得るでしょうか？」

「つまりある精神に導かれていないという意味か。クセノファネスを読んで見てはどうだね」

「もちろん」とファット。「コロフォンのクセノファネスですね。『一つの神があり、肉体の形態も、心の中の思考においても、死すべき生物たちとはまったく異なる。その存在すべてが見て、その存在すべてが考え、その存在すべてが聴く。常に同じ場所で身動きせずにとどまる、あちこち動きまわるのは正しく』」

「『ふさわしく』だ」ストーン医師は訂正した。「『いまはこちら、こんどはあちらと動き回るのは、その存在にふさわしくない』。そしてここからが重要な断片 25 だ。『だがその存在は楽々と、心の思考によってあらゆるものを身にまとう』」

「でもその存在は非理性的かもしれない」

「なぜわかる？」

「宇宙全体が非理性的かもしれない」

ストーン医師は言った。「何と比べて？」

ファットはそこまで考えていなかった。だが、考えてみるとすぐに、それが自分の恐怖を打ち破ってはくれないことに気がついた。むしろ恐怖を拡大した。もし宇宙全体が非理性的な　つまりはイカれた　精神によって導かれているために非理性的なら、ストーンがたった今持ち出したまさにその理由から、ある生物種がまるごと誕生し、生きても、その非理性ぶりにまったく気がつかずに死滅するかもしれない。

「ロゴスは理性的じゃない」とファットは口に出して決意した。「おれの言うプラテスマというやつは。ナグ・ハマディでの写本の中に情報として埋められたものは。でもそれが今やわれわれの元に戻ってきて、新しいホモプラテスマを作り出している。ローマ人たち、帝国がもとのやつを殺してしまった」

「だがきみの説だと本当の時間は、ローマ人たちが神殿を破壊した紀元 70 年に止まったんだろう。だからいまはまだローマ時代だ。ローマ人たちはまだいる。現在はだいたい」
ストーン医師は計算した。「だいたい紀元 100 年くらいだ」

そのときファットは、これで自分の二重露出が説明できるのに気がついた。古代ローマと、1974 年のカリフォルニアとの重ね合わせがこれで理解できる。ストーン医師があいつのために解決してくれたのだ。

あいつの狂気を治療するはずの担当精神科医が、それを肯定してしまった。いまやファットは、自分が紙と会ったという信念を決して捨てることはない。ストーン医師がそれを証明してしまったのだ。

第5章

ファットは北部病棟で、コーヒーをのんだり読書したり、ダグと散歩をしたりしつつ13日を過ごしたが、二度とストーン医師には会えなかった。ストーンは病棟の中の患者や職員みんなだけでなく、病棟全体の責任者だったから、あれこれ業務がありすぎたのだ。

いや、病棟から退院するときに、ほんの少しくソせわしないやりとりはあった。

「退院していいだろう」ストーンはうれしそうにいった。

ファットは言った。「でも教えてください。おれが言いたいのは、宇宙を導いている精神が何も無い、ということじゃない*1。おれはクセノファネスが思いついたような精神を考えてるんですが、でもその精神は狂ってるんです」

「グノーシス派は、創造神が狂っていると信じていたよ」とストーン。「盲目だね。見せたいものがあるんだ。まだ刊行されていない。ナグ・ハマディ文献をベスゲといっしょに翻訳しているオーヴァル・ウィンターミュートからのタイプ原稿だよ。この引用は「世界の起源について」からのものだ。読んでごらん。

ファットは貴重なタイプ原稿を手にして黙読した。

「かれは言った。『わたしは紙でありわたし以外に他の紙はない』。だがかれがそう言ったとき、それはすべての不死なる（不滅なる）ものたちに対する罪を犯したこととなり、そのものたちはかれの守護者たちだったのだ。さらにピスティスは主支配者の不敬ぶり見て、腹をたてた。目の届かないところで彼女はこういった。『サマエル（すなわち盲目の紙）、おまえはまちがっている』『おまえより先に、叡智を持った不死の者が存在する。その者がおまえの形作ったものたちの中に現れるだろう。その者は、お前を陶工の粘土のように踏みつけることだろう、粘土は踏みつけられるものなのだから。そしておまえは、おまえの作ったものたちとともに、母なる深遠へと落ちるだろう』」

ファットは読んだことをすぐに理解した。サマエルは創造の紙であり、自分が創世記に

*1 訳注：ここも大瀧の訳は初歩的なミス。

述べられたとおり唯一の紙だと信じていた。だが。そいつは盲目だった、つまりは阻害されていた。「阻害」はファットの頻出語だった。他のあらゆる用語を含んでいる：発狂している、狂っている、不合理、イカレてる、おかしい、精神異常など。その盲目性（非合理性、つまりは現実から切り離されている）のためにそいつが気がつかなかったことというのは

タイプ原稿には何と書いてあったっけ？ あいつは必死で原稿を読み返しはじめたが、そこでストーン医師があいつの腕を叩いて、そのタイプ原稿はとっときなさいと言ってくれた。ストーンはもうそれを何部もコピーしてあったのだ。

創造の紙より先に、叡智を持った不死の者が存在していたんだ。その叡智を持った不死の者が、サマエルがその後創造する人類の中に現れるんだ。その叡智を持った不死の者は、創造の紙より前に存在して、ろくでもない盲目のイカレた創造者を陶工の粘土みたいに踏みつけにするんだ。

だからファットの紙との 真の紙との 遭遇は、ステファニーが蹴りろくろで作ってくれた小さな壺オー・ホーを通じてやってきたんだ。

「じゃあおれはナグ・ハマディについては正しかったんだ」とあいつはストーン医師に言った。

「自分でわかるだろう」と言ったストーン医師は、続けてファットにこれまでだれも言ってくれなかったことを言った。「きみが権威だからね」と。

ファットは、ストーンがあいつの ファットの 精神的な生を回復させてくれたことに気がついた。ストーンは名医だったのだ。ストーンがファットがらみて言ったりやったりしたことはすべて、療法上の根拠、治療のための力を持っていた。ストーンの情報に正確だったかどうかはどうでもよかった。ストーンが最初から目指していたのは、ファットがあいつ自身に対して抱く自信を回復させることだった。ファットは、ベスが去ったときに自信をなくしていた 実際には、何年も前にグロリアの命を助けられなかったときに自信を失っていたのだった。

ストーン医師は狂ってなんかいなかった。ストーンは治療者だった。正しい仕事を続けていた。たぶん、多くの人を様々なやり方で治療してきたのだろう。療法を個人にあわせるようにして、個人を療法にあわせようとはしなかった。

すごいもんだ、とファットは思った。

「きみが権威だからね」という簡単な一文で、ストーンはファットに魂を回復させたのだった。

グロリアが、あの醜悪で悪意まみれの心理的自殺ゲームで奪っていった魂だ。

やつらは 「やつら」に注目 ストーン医師を雇って、病棟にやっていた患者を破

壊したのがなんなのかをつきとめさせた。それぞれの患者は、人生のいつか、どこかの時点で、銃弾が放たれた。その銃弾は患者に入り、痛みが拡がりだす。痛みは抜け目なくその患者を診たし、やがて患者は真ん中からまっぴたつに引き裂かれる。職員の仕事、そして他の患者たちですらやらなくてはならないのは、その人物をもとに戻すことなのだけれど、弾丸が残っている限りそれは不可能だ。もっと腕の悪い療法家たちがやったのは、その人物が二つに分裂していることを記録して、統一体へとつなぎ戻す作業を開始するだけだ。でもかれらは弾丸を見つけて除去することはできなかった。患者に放たれた致命的な弾丸は、心理的に傷を負った人物に対するフロイトの当初の攻撃の基盤となっていた。フロイトにはわかっていたのだ。かれはそれをトラウマと呼んだ。そのうち、みんな致命的な弾丸を探すのに飽きてきた。時間がかかりすぎるのだ。患者について調べるべきことが多すぎる。ストーン医師には超常的な才能があった。ちょうどあの超常的なベイチ療法と同じだ。あのバッチ療法は見え透いたインチキでしかなく、患者に耳をかたむけるための口実でしかない。花を浸したラム酒　単にそれだけ、そして鋭い心が患者の発言に耳を傾けている。

レオン・ストーン医師は、実はホースラヴァー・ファットの人生で最も重要な人物の一人なのだった。ストーンに出会うために、ファットはほとんど自分を肉体的に殺し、自分の精神の死とマッチした状態にしなきゃならなかった。紙が御業をなす謎めいた方法っていうのは、この手の話なのか？　ファットがレオン・ストーンと出会う方法が他にあったらどうか？　自殺未遂くらいの陰気な行為、本気で死にかけない行為でもなきゃそんなことは実現しなかったらう。ファットは死ななきゃ、あるいは死にかけなきゃ、癒されることはなかった。というか、癒されかけることは。

レオン・ストーンは今はどこで診療しているんだろう。治癒率はどのくらいだろう。どうやってあの超常的な能力を手に入れたんだろう。ぼくはいろんなことを考える。ファットの人生で最悪のできごと　バスに見捨てられたこと、クリストファーを連れて行かれたこと、ファットの自殺未遂　は果てしないありがたい帰結をもたらした。ある一連のできごとの善し悪しを最終的な結果で判断するなら、ファットはちょうど人生最良の時期を体験したことになる。北病棟から出てきたときには、これ以上はいくら力強くなっていた。というのも、だれでも無限の強さは持っていないからだ。走り、飛び、跳ね、這いずるすべての生き物には、防ぎようのない究極の宿敵がいて、それが最後にそいつをやっつける。でもストーン医師はファットに失われた要素を追加してくれた。なるべく多くの人を道連れにしようとしたグロリア・クヌードソンが、半ば意図的にあいつから奪った要素：自信という要素だ。「きみが権威だからね」とストーンが言うだけで十分だった。

ぼくはいつもみんなに言うんだが、どの人にもその人を破壊してしまえる一文　言葉

の並びがある。ファットがレオン・ストーンの話をしてくれたとき、ぼくが気がついたのは（これは最初の気がつきから何年もたってのことだった）その人を癒してくれる別の一文、別の言葉の並びが存在するということだ。運がよければ二番目のやつがわかるけれど、でも最初のやつは確実に言われる。最初の致命的な文を他人に対してどう繰り返せばいいかは、各人が自力で訓練なしに知っているけれど、二番目の文を繰り返すには訓練が要る。ステファニーは、小さな陶器の壺オー・ホーを作って、愛のこもった贈り物としてファットにあげたときに、かなりいい線まできていたのだ。でも彼女はその愛を表現する言語能力を持っていなかった。

ストーンはファットにナグ・ハマディ文書からのタイプ原稿を渡したとき、「壺」や「壺作り」がファットにとって重要な意味を持つことをどうやって知ったんだろう？ それを知るには、ストーンはテレパシーでも使えなきゃいけない。うーん、ぼくには見当もつかない。ファットはもちろん、考えを持っている。あいつは、ストーン医師はステファニーと同じく、紙様の微小形態だと思っていた。だからぼくは、ファットが癒されたとは言わず、癒されかけたと言ったのだ。

でも善意の人々を紙様の微小形態と考えることで、ファットは少なくともよい紙様とつながりを持っていたわけで、盲目の残酷で邪悪な紙様とではなかった。この点は考慮すべきだろう。ファットは紙様を高く評価していた。ロゴスが理性的で、ロゴスが紙様と同じなら、紙様は理性的だとしか考えられない。だから第四福音書でのロゴスの正体に関する一文はとても重要なのだ。「*Khair theos en ho logos*」つまり「そして言葉は紙であった」。新約聖書でイエスは、自分以外には紙を見た人はいないと言っている。つまり第四福音書のロゴスであるイエス・キリスト以外には。これが正しければ、ファットが体験したのはロゴスだ。だがロゴスは紙様そのものだ。だからキリストを体験するということは紙様をたいけんするということだ。おそらく、もっと重要な一文が新約聖書の中でほとんどの人が読まない部分にある。みんな福音書は読むし、パウロの手紙も読むだろう。でもヨハネの第一の手紙なんてだれも読まない。

愛する者たち、わたしたちは今既に紙の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。

（ヨハネの手紙一、3;1/2）

これは新約聖書で一番重要な文だと言えるだろう。一般的には知られていない文の中では間違いなく最も重要だ*。「御子に似た者となる」。つまり、その人が紙様と同じ形をしているということだ。「御子をありのままに見る」。紙様の示現が生じるということだ、少

なくとも一部の人には。ファットは自分の遭遇のすべての根拠としてこの一節を挙げられる。紙様との遭遇は、ヨハネの手紙一、3;1/2　これは聖書学者の書き方で、連中が一瞬で読み取れる暗号のようなものだ。なんか変な感じだけど^{*2}　の約束の成就であると主張できる。奇妙なことに、この一節はある程度まで、ファットが北部病棟から放免されたときにストーン医師がファットに渡したナグ・ハマディのタイプ原稿とうまくかみ合っている。人と真の紙様は同じだ　ちょうどロゴスと真の紙様が同じなように　だが狂った盲目の創造主と、そのいかれた世界が人と紙様とを分断している。盲目の創造主は本気で自分が真の紙様だと信じているが、それはまさにその障害のひどさを物語るものだ。これがグノーシス主義だ。グノーシス主義では、人は紙とともにあり、世界とその創造主（どちらも、自分で認識しようといまいと狂っている）と対立している。ファットの質問「宇宙は理性的だろうか、そして非理性的であるなら、それは非理性的な精神に支配されているからだろうか？」は、以下の答えをストーン医師を通じて得ることになる：「そうです、宇宙は非理性的です。それを支配している精神は非理性的です。でもその上に別の紙、真の紙がいて、それは非理性的ではありません。さらにその真の紙はこの世界の力を出し抜いて、敢えてここにやってきてわれわれを助けようとしてくれており、われわれはかれをロゴスとして知っているのです」そしてロゴスというのは、ファットによれば、生きた情報だ。

ロゴスを生きた情報と呼ぶファットは、広大な謎を解明したのかもしれない。でも、してないのかも。この種の話を実証するのはむずかしい。だれにきけばいい？　ファットは幸運なことに、レオン・ストーンに尋ねた。職員のだれかに尋ねたかもしれないし、もしそうしていたら、まだ北病棟にいてコーヒーを飲み、読書して、ダグとうろついていただろう。

他の何にもまして、他のすべての側面や対象を上回る形で、あいつの遭遇の質がある。ファットはこの世に侵入した慈悲深い力を目撃した。他にぴったりくる用語はない。その慈悲深い力は、それが何であるにせよ、戦いの準備万端な英雄のようにこの世に侵入したんだ。それであいつは震え上がったけれど、でも一方でそれは喜びを喚起もした。あいつはそれがどういう意味かわかったからだ。助けがやってきたのだ。

宇宙は非理性的かもしれないけれど、何か理性的なものがそこに忍び込んできたのだ。それは夜盗が眠る家族の家に忍び込むように、場所の面でも時間の面でも予想外のところに入り込んできた。ファットがそれを見たのは　あいつが何か特別なものを持っていた

^{*2} 訳注：ここの大瀧訳は、まったく話が理解できていない代物。ディックは単にこの聖書の一節を参照するときの番号の記述方法について語っているだけ。大瀧訳だと：「この一節はあつという間に読めるが、聖書研究家たちが指摘しているように、見かけ通り謎めいている一種の暗号なのだ」だって。大瀧はここで、ディックが何の話をしているのかさえわかっていない。

からでなく 向こうのほうがあいつにそれを見てほしがったからだ。

通常、それはカモフラージュされたままだ。通常、それがあらわれるときは、地と見分けられる人はだれもない ファットがいみじくも表現したように、地とまじりあっている。あいつはそれに名前をつけていた。

シマウマ。それが周囲にとけ込んでいるから。これは擬態と呼ばれる。またの名を模倣。一部の昆虫はこれをやる。他のもののふりをする。一部の生物学者や自然学者は、もっと高度な擬態があるんじゃないかと考えている。なぜかというと、低い形態のものつまり、だますべき相手はだますけれど人間はだませないような形態のもの^{*3} は世界中に存在しているからだ。

高度な感覚擬態が存在したらどうだろう 高度すぎて、人間がだれも（またはごく少数の人だけしか）検出できないような擬態があったら？ それを検出されるのは、それ自身が検出されたいと望んだときだけだったら？ これは実は検出されたとはいえないだろう、というのもそうした状況では、それは偽装状態から出てきて自らを明かしたことになるからだ。「明かす」というのはこの場合には「神性示現」と同じかもしれない。驚愕した人間は、それを見て、おれは紙を見た、というかもしれない。でも実際には、過去のある時点でここにやってきた、高度に進化した超地球生命体 (UTI) または地球外生命体 (ETI) を見ただけかもしれない……そしてそれはひょっとしたら、ファットが推測したように、休眠種子形態で生きた情報としてナグ・ハマディ文書の中で二千年近くまどろんでいたのかもしれない。これでなぜその存在の報告が紀元 70 年頃に突然なくなるのかが説明できる。

ファットの日誌（つまり釈義）の記述 33 号：

この孤独、この後に残された『精神』の苦悶は、宇宙のあらゆる構成要素に感じられた。その構成要素はすべて生きている。だから古代ギリシャ思想家たちは物活主義者だった。

「物活主義者」は、宇宙が生きていると信じている。すべてが生きているという汎精神論とだいたい同じ考え方だ。汎精神論や物活主義は、以下の二種類に分類できる：

1. すべての物体は独立して生きている。
2. すべての物体は一つの統一的な存在である。宇宙は一つの物体として生きており、一つの精神だけを持つ。

ファットはこの二つのいわば中道を見つけた。宇宙は一つの巨大な非理性的存在で構成

^{*3} 大瀧訳では「敵をだます」ことになっているけれど、擬態は敵をだますだけのものじゃないのだ。

され、その中に高度な擬態でカモフラージュした高度生命形態が侵入した。そしてその擬態のために、その気になればいつまでたっても ぼくたちには 検出されない。それは物体や因果プロセスを真似る（これがファットの主張だ）：単に物体を真似るだけでなく、その物体のやることも真似る。ここから、ファットがシマウマをずいぶん大きなものとして考えていることが理解できるだろう。

一年にわたって自分とシマウマまたは紙様またはロゴスとの遭遇を分析した結果、ファットはまずそれがぼくたちの宇宙に侵入したという結論に達した。そしてその一年後に、それがぼくたちの宇宙を消費している つまりむさぼり食っている ことに気がついた。シマウマはこれを、化体とよく似たプロセスで実現した。化体というのは、二種類の物体、葡萄酒とパンが、目に見えない形でキリストの血と肉になるという聖餐の奇跡のことだ。

ファットはこれを教会の中で見るかわりに、普通の世の中で見た。しかもミクロ形態ではなくマクロ形態、つまり、あまりに広大すぎて果てすら見極められないような規模で行われているのを見た。もしかすると全宇宙が、紙様に変化する目に見えないプロセスの途上にある。そしてこのプロセスに伴ってやってくるのは知覚力だけじゃない 正気もやってくる。ファットにとってこれは慈悲深い解放となるだろう。あいつは自分自身の中でも外でも、あまりに長いこと狂気に耐えてきたからだ。正気の到来ほどあいつにとってうれしいことはない。

ファットがキチガイだったとしても、非理性の中に理性的なものが侵入してくるところに遭遇したと信じるなんてのが、ずいぶん変なキチガイぶりだというのは認めなきゃいけない。それをどうやって治療しよう？ その患者をふりだしに送り返すのか？*4その場合、あいつはいまや理性的なものから切り離されたことになる。これは治療法という観点からして筋が通らない。これは自己矛盾であり、ことばの矛盾だ。

でも、ここではもっと基本的な意味論上の問題があらわになっている。たとえばぼくがファットにこう言ったとしよう（またはケヴィンがファットに言ってもいい）：「おまえは紙様を体験したりしてないよ。単に紙様の性質と側面と正確と力と叡智と善を備えた何かを体験しただけだよ」。これはドイツ人の二重抽象性好きに関する冗談みたいなものだ。英文学に関するドイツ人の権威がこう宣言する：「『ハムレット』を書いたのはシェイクスピアではない。単にシェイクスピアという名前の人物が書いたにすぎない」。英語では、このちがいは表現上だけのもので、意味はないけれど、ドイツ語という言語はこの差を表現できる（これはドイツ精神の奇妙な特徴をある程度は説明してくれる）。

*4 大瀧は square one という表現（最初のマス目、つまりゲームのふりだし）を知らず、「悩める者を堅物かたぶつのところへ連れて行くのか」なんていう珍妙な訳をしている。

「おれは紙様を見た」とファットが述べ、ケヴィンとぼくとシェリーは「いいや、おまえは紙様みたいなものを見ただけだよ、まったく紙様と同じようなものを」と述べる。そしてそう言ったぼくたちは、そこにとどまって答えを聞こうとはしない。「真実とは何か」と尋ねるはずらっぽいピラトのように。

シマウマはぼくたちの宇宙に親友して、頭蓋骨をあっさり通してファットの脳に次々と、情報豊かな色つきの光をビームとして次々に発射して、あいつの目をくらませて発狂させてクラクラさせて混乱させたけれど、でも語れないほどの知識を与えてくれた。手始めに*⁵、クリストファーの命を救ってくれた。

もっと正確に言えば、それはその情報を発射するために侵入してきたわけじゃない。過去の時点ですでに侵入はしていた。それがやったのは、カモフラージュ状態から進み出てきたということだった。地を背景として自分を明かし*⁶、ぼくたちの計算では補正できない速度で情報を発射した。数ナノ秒で、図書館を丸ごといくつも発射した。そして現実の経過時間で初時間にわたりそれを続けた。現実経過時間で8時間には大量のナノ秒が存在する。閃光のような速度で、人間の右脳半球に莫大な画像データを注入できる。

タルサスのパウロは似たような経験をしている。ずっと昔のこと。そのほとんどについて、かれは話すのを拒んだ。かれ自身の発言によれば、かれの頭に発射された情報のほとんど　ダマスカスへの道中に、ずばり眉間に放射されたのだ　はかれと共に語られぬまま死んだ。宇宙は混沌が支配しているけれど、聖パウロは自分がだれと語ったか知っていた。そのことは語っている。シマウマもまた、ファットに正体を明かした。それは「聖ソフィア」を名乗った。この呼称はファットのなじみのないものだった。「聖ソフィア」はキリストのあまり知られていない位格だ。

人と世界はお互いにとって有害だ。でも紙様　真の紙様　はその両方を貫通し、人も貫通して世界も貫通し、風景を正気に戻す。でもその紙様、外からきた紙様は、強烈な抵抗に遭遇する。インチキ　狂気によるごまかし　はそこらじゅうにあり、正反対のものとして仮装する：正気のふりをするのだ。でもその仮装はすり減って薄くなり*、狂気があらわになる。醜いもんだ。

治療はここにあるが、病気もやっぱりここにある。ファットがしつこく繰り返すように「『帝国は実は終わっていない』」。危機に対する驚くべき対応として、真の紙様は宇宙の、まさに自分が侵入した領域を擬態する。ドブの中の*棒や木やビール缶と似た形となる　捨て去られたゴミのふりをし、もはや気にも留められない滓のふりをする。潜む真の紙様は、文字通り現実もぼくたちをも待ち伏せる。ファットが証言できるように、生き

*⁵ 訳注：ここも大瀧訳はまるっきりかんちがい。

*⁶ 訳注：set to ground は、図と地の関係の話をしているのだが、大瀧は「地面にへばりついている」なる訳をしている。

た紙様に奇襲をくらうのはおっかない体験だ。だからぼくたちは、真の紙様は習慣として自らを隠す、という。ヘラクレイトスが「潜在的な形態は顕在的な形態を支配する」「物事の本質はそれ自身を隠す習性にある」と書いてから 2500 年たっている。

つまり理性的なものは、種子のように、非理性的な巨体の中に隠されている。その非理性的な巨体はどんな役割を果たすのか？ グロリアが死ぬことで何を得たかを考えてみるといい。彼女自身にとっての彼女の死ではなく、彼女を愛した人々にとって何がもたらされたか。悪意？ 証明されていない。憎悪？ 証明されていない。非理性的なもの？

うん、これは証明済みだ。友人たち たたとえばファット に対する影響から見ると、はっきりした目的は達成されていないけれど、でも目的があったにはちがいない：目的なしの目的というやつだけれど、想像つくかな？ 動機は、動機がないことだった。ニヒリズムの話をしている。他のすべてのもの、死そのもの死への意志の下にも何か別のものが横たわっていて、その何か別のものは無だ。現実の根底にある基層は是非現実だ。宇宙が非理性的なのは、それが単に流砂の上に築かれてるからじゃない 存在しないものの上に築かれているからだ。

ファットにしてみれば、以下のことを知っても何の役にも立たない：グロリアが死んだとき、なぜ自分を道連れにしたか あるいはしようとする限りのことをしたか。「おいこのクソ女め」ともしそのときにグロリアを捕まえられたら、あいつはこう言っただろう。「いったいどうしてなんだよ？ まったくなんだってなぜなんだよ？」これに対して宇宙はうつろにこう答えただろう。「わたしのやり方は必ずしも理解はできないんだよ、人間よ」。これはつまりこう言ってることになる。「わたしのやりかたは意味不明だし、わたしの中に住む者たちのやり方も筋が通らないんだよ」

ファットに訪れつつある悪い知らせは、この時点では、北病棟から釈放された時点では、慈悲深くもまだあいつの知るところではなかった。ベスのところには戻れなかったから、シャバに出たらだれのところに行けばいいだろう？ ファットの脳内では、自分が北病棟にいる間、癌からの緩解期にあったシェリーはかいがいしく見舞いに来てくれたことになっていた。だからファットの思いは彼女に粘着して、この世に自分の真の友人がいるとすればそれはシェリー・ソルヴィグであると信じ込んだ。ファットの計画はまばゆい星のように展開した。シェリーと同棲して、緩解の間は気落ちしないようにしてやり、緩解が終わったら自分の入院時にしてくれたように、面倒を見てやるのだ。

ストーン医師は、まるでファットを治療してはいなかった。これは後にファットを動かす原動力が暴露されたときに明らかになったことだ。ファットは今回、これまでのいつにもまして、急速かつ見事に死にくらいついたのであった。ファットは苦痛を見つけ出すプロになった。このゲームの規則を学んで、今やそのやり方も身につけた。ファットが自分の

狂気　ファット自身の分析によれば、狂った宇宙からいただいたものだ*　の中で追い求めたのは、死にたがっているだれかに道連れにしてもらったことだった。あいつが自分の住所録を探したとしても、シェリーより好適な相手は見つからなかっただろう。北病棟の収用中にあいつがこんなことを計画しているとわかっていたら「すばらしい動きだぜ、ファット。今度こそばっちり大当たりを見つけたな*」とでも言ってやったことだろう。シェリーのことなら知っていた。緩解から抜け出す方法をなんとか見つけようといつも苦闘していたっけ。自分を助けてくれた医師たちに対し、絶えず怒りと憎悪を表明していたことでそれがわかったんだ。でも、ファットの計画は知らなかった。ファットはそれを、当のシェリーからさえ秘密にしていた。彼女を助けてやるんだ、とファットは、イカレた脳の奥底でつぶやいていた*。シェリーが健康でいるのを手伝ってあげるけれど、もしまた病気になったら、そばについて、彼女のために何でもしてあげるんだ。

あいつのまちがいは、脱構築してみると*、要するにこういうことだ：シェリーは単に、また病気になろうと計画してただけじゃない。彼女もグロリアと同じように、できるだけ多くの人間を道連れにしようとしていた　相手が自分に抱いている愛情に比例する形で。ファットは彼女を愛していたし、もっとひどいことに、彼女に感謝の念を抱いていた。この粘土から、シェリーは自分が脳みそとして使っているゆがんだ蹴りろくろによって壺を作り*7、それによってレオン・ストーンのやったことをたたきつぶし、ステファニーがやったことをたたきつぶし、紙様のやったことをたたきつぶすことができた。シェリーはその衰弱した肉体に、生ける紙様を含めたこうした他の存在すべてをあわせたよりも大きな力を宿していた。

ファットは反キリストに自分を結びつけることにしたのだった。しかも、あらゆる動機の中で最高のもののために。愛と感謝と、彼女を助けたいという欲望からだ。

まさに地獄の力が食べ物にするものだ：人の最高の本能だ。

*

シェリー・ソルヴィグは、貧乏だったから、台所のない小さなボロ部屋に住んでいた。皿は洗面所の流しで洗わなければならなかった。天井には上階のトイレがあふれたために大きな水しみができていた。何度かここを訪問して、ファットはここを知っていたし、陰鬱な場所だと思っていた。シェリーがここを引き払ってもっとすてきなアパートに移れば、現代的で台所のあるアパートに移れば、気持ちも上向くだろうと感じていた。

言うまでもなく、シェリーがわざとこんな住まいを求めたのだという認識は、一度たりともファットの頭には浮かばなかった。この陰気な環境は、彼女の苦痛の結果として生じ

*7 訳注：大瀧はここで throw を「投げる」と字面通りの訳をしているが、これは辞書にも載っている「ろくろで作る」という意味。

たのであって、その原因ではなかった。どこへいっても、彼女はこうした環境を再現できた。これはファットがやがて発見したことだった。

でもこの時点では、ファットは精神的・肉体的な組み立てラインを動員して、ほかのどれよりも先に心臓集中治療病棟に、そして北病棟に見舞いに来てくれたこの人物に対し、果てしない善行をほどこそうとしていた。シェリーはキリスト教徒であることを述べた公式文書を持っていた。週に二回、聖餐式に出ていて、いつか聖職につくのだ。それと、自分の司祭をファーストネームで呼んでいた。信仰とこれ以上はないくらい密接な関係を持っていたわけだ。

ファットは何度がシェリーに、紙様との遭遇について話した。シェリーはまったく感心してくれなかった。というのもシェリー・ソルヴィグは、紙様との遭遇は特定のチャンネルを経由するしかないと思っていたからだ。シェリー自身はそうしたチャンネルにアクセスできた。そのチャンネルとは司祭のラリーだ。

あるときファットは、ブリタニカ大百科からマルコ福音書とマタイ福音書における「秘密性の主題」、つまりキリストが教えを寓話に包み隠したのは、大多数　つまり多くの部外者たち　がそれを理解できず、したがって救いが得られないようにするためだという発想について、シェリーに朗読してやった。この見方というか主題によれば、キリストは自分の小さな身内だけを救おうと考えていた。ブリタニカはこれを率直に論じていた。

「そんなのでたらめよ」とシェリー。

ファットは言った。「それって、ブリタニカがまちがってるってこと、それとも聖書がまちがってるってこと？　ブリタニカは単に　　」

「聖書にはそんなこと書いてないわ」シェリーはいつも聖書を読んでいた、少なくともいつも聖書を持ち歩いてはいた。

ルカ福音書での引用を見つけるのには何時間もかかったが、ファットはやっとそれを見つけて、シェリーに示した。

弟子たちは、このたとえはどんな意味かと尋ねた。イエスは言われた。「あなたがたには紙の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ。それは『彼らが見ても見えず、聞いても理解できない』ようになるためである。」

「そこが聖書の改ざんされた部分じゃないかどうかラリーにきいてみるわ」とシェリー。

むかついたファットは、いらだたしげに言った。「シェリー、聖書の中でお眼鏡にかなう部分を全部切り抜いてくっつけとけよ。そしたら残りは相手にしないですむだろ」

「何カリカリしてんのよ」とシェリーは、ちいさなクローゼットに服をかけた。

それでもファットは、自分とシェリーとが共通の絆を持っていると思いこんでいた。どちらも紙様の存在に同意している。キリストは人々を救うために死んだ。これを信じない人は何もわかつちやいない。ファットは自分が紙様を見たと告白し、その知らせをシェリーは平然と受け止めた（そのとき彼女はアイロンがけをしていた）。

「これって神体示現って言うんだぜ。公現とか」とファット。

「公現ってのは」とシェリーは、ゆっくりしたアイロンがけのペースに声をあわせ、「一月六日に祝われるお祭りで、キリストの洗礼の日なのよ。あたしはいつも行くわよ。あなたもどう？ 美しい儀式なのよ。ねえ、こんな冗談を聞いたんだけど」彼女はだらだらと話し続けた。ファットは唾然とした。そして話題を変えることにした。いまやシェリーは、ラリー ファットにとってはミンター神父 が、聖餐の葡萄酒をひざまずいた女性拝領者の深く開いた胸元に注いだという一件の話をしている。

「洗礼者ヨハネはエッセネ派だったと思う？」とファットはシェリーに尋ねた。

シェリー・ソルヴィグは、自分が神学上の質問に対して答えを知らないと認めることは決してなかった。どんなに追い詰められても、せいぜいが「ラリーにきくわ」という答えの形で表面化するくらいだった。ファットに向かっていまのシェリーは平然とこう答えた。「洗礼者ヨハネは、キリストの前に訪れるエリヤだったのよ。キリストもそれをきかれて、洗礼者ヨハネは約束のエリヤだったと言ったわ」

「でもエッセネ派だったの？」

アイロンがけの手を一瞬とめて、シェリーは言った。「エッセネ派って死海に住んでなかったっけ？」

「まあ厳密にはクムラン涸谷にね」

「あなたのお友達のパイク司教って死海で死んだんじゃないっけ？」

ファットはパイク司教の知り合いだったし、口実さえあればその事実をいつも得意げに吹聴したものだ。「そうだよ。ジムと奥さんは、フォード・コルチナに乗って死海砂漠に乗り出したんだ。コカコーラのびんを二本持って。たったそれだけ」

「その話はもう聞いたわよ」シェリーはアイロンがけに戻った。

「おれがまったく解せないのは、なぜ二人が車のラジエータの水を飲まなかったのかってことなんだ。砂漠で車が壊れて身動きとれなくなったらそうすればいいんだ」何年にもわたり、ファットはジム・パイクの死を気に病んでいた。それがなぜか、ケネディ家の暗殺とキング牧師の暗殺と関係していると想像していたが、それを裏付ける証拠は一切持っていなかった。

「ラジエータに入ってたのが不凍液だったんじゃないの？」とシェリー。

「死海砂漠で？」

シェリーは言った。「どうも車の調子がおかしいのよ。17番地のエクソンのガソリンスタンドの人は、エンジンのマウントがゆるいって。それってヤバいの？」

シェリーのおんぼろ車の話なんかしたくなくて、むしろジム・パイク談義を続けたかったファットは「知らない」と言った。どうやって友人の謎めいた死に話を戻そうか考えようとしたが、できなかった。

「まったくろくでもない車だわ」とシェリー。

「きみは一銭も払ってないだろ。あいつがくれたんじゃないか」

「『一銭も払ってない』ですって？ あの車をもったおかげで、あたしはあいつの所有物みたいな気分させられたのよ」

「きみには絶対に車をあげないようにしよう」とファット。

この日、すべてのヒントはファットの目の前にあった。シェリーのために何かしてあげると、彼女は感謝しなければならないと感じる。実際には感謝しなかったが、そしてそれを重荷であり、うんざりするような責務だと感じるのだ。でもファットはこれに対するお手軽な合理化を用意していて、それを早速持ち出し始めていた。シェリーのために何かをするのは、お返しを求めてのことじゃない。故に、感謝は求めない。故に、感謝されなくてもかまわないのだ。

ファットが気がつかなかったのは、感謝がないということだけでなく（これならファットも心理的に扱いきれた）、そのかわりに露骨な悪意が出てくるということだった。ファットはこれに気がついてはいたが、それをただの苛立ち、一種のせっかちさでしかないとして黙殺していた。助けてもらってお返しに悪意を向ける人がいるとは信じられなかったのだ。だから、自分の正気が訴えかけてくる証言を割り引いてしまった。

あるとき、カリフォルニア大学のフラートン校で講演をしたとき、ある学生が現実というものの簡潔な定義を尋ねた。ぼくは考えてみてこう答えた。「現実とは、それを信じることをやめてもなくなるもののことである」

ファットは、シェリーが助けてもらったために悪意を返したとは信じなかった。でもそう信じられなくても、何も変わらなかった。だから彼女の反応は、ぼくたちが「現実」と呼ぶものの枠組みの中にある。ファットは、好むと好まざると、何らかの形でそれと対応しなければならぬが、そもそもシェリーと社会的に会うのをやめなくてはならなかった。

バスがファットを捨てた理由の一つは、かれがサンタアナのボロ部屋のシェリーを訪ねるために生じたものだった。ファットは自分が慈悲心で彼女を訪ねているのだと自分で自分をごまかしていた。実際には単に、バスが自分に対して性的な関心を失って、いわば最近あっちのほうでご無沙汰だったために、ムラムラと催していただけのことだった。いろいろな形でシェリーはきれいだと思えたのだ。そして確かにシェリーはきれいだった。み

んなそれには同意した。化学療法の間、彼女はかつらを被っていた。デヴィッドはそのかつらにだまされて、しばしば髪がきれいだとほめ、シェリーはそれをおもしろがっていた。ぼくたちはそれが不気味だと思っていた。どちらの側も。

現代人においてマゾヒズムがどんな形態を取るかという研究で、シオドア・レイクはおもしろい見方を提起している。マゾヒズムは薄まった形を取るの、実際には思ったよりも広がっているのだという。基本的な力学は以下の通り：人は何か悪いモノを見て、それが避けられないものだと思う。そのプロセスを止める方法はない。無力だ。この無力感、きたるべき苦痛に対して何かコントロールを握りたいというニーズを生み出す。どんな形のコントロールでもいい。これは筋が通っている。無力感という主観的な感情は、やがて訪れるはずの惨めさよりももっと苦痛なのだ。そこでその人物は、自分にできる唯一の形で事態を牛耳ろうとする。その来るべき悲惨さを受け入れる。それを早める。自分の側がそういう活動をすることで、自分が苦痛を楽しんでいるという印象が強まる。でも実はちがう。自分の無力さ、あるいは無力ぶりだと思っているものが耐えられなくなっただけだ。でも、避けがたい悲惨に対するコントロールを握る過程で、その人物は自動的に無快感となる（つまり喜びを享受できないか、享受したがらなくなる）。無快感はこっそりと忍び寄る。何年もかけてその人を支配するようになる^{*8}。たとえば、満足を先送りするようになる。これは無快感の陰気なプロセスの第一歩だ。満足を先送りできるようになると、何か自分を克服できたような気分を味わう。ストイックで規律を身につけたような気になる。衝動に負けなくなったと思う。支配能力を得たわけだ。自分の衝動に対して自分自身を支配できるし、外的な状況に対しても支配できる。やがてそこから派生して、外部状況の一環である他人を支配するようになる。人を操るようになるのだ。もちろん自分ではそれに気がついていない。自分では単に、自分の無力感を軽減しただけだ。でもその感覚を弱めるために、かれはこっそりと他人の自由を圧倒する。でも、そこからは何の喜びも得ることはないし、心理学的にプラスの利得はまったくない。得られるものはすべてマイナスなのだ。

シェリー・ソルヴィグは癌、リンパ癌にかかっていたが、医師たちの奮闘によって緩解に入っていた。でも脳の記憶テープの中には、リンパ癌の患者は緩解しても、やがてまた悪化するというデータが入っていた。治ったわけじゃない。疾患はどういうわけか不思議にも、蝕知できる状態から一種の形而上学的な状態、どっちつかずの状態になっただけだ。そこにあるけれどない。だから目下は健康だったけれど、シェリーの中にはタイマーがちくたくと動いていて（とシェリーの心は告げていた）時間がきたら彼女は死ぬ。そ

^{*8} 訳注：大瀧はここで無快感というのを性的快楽だけの話だと思っているので、この付近の訳文は意味不明。実際は、喜び全般を指している。

れはどうしようもない。できることといえば、必死になって第二の緩解をもたらそうとするだけ。でも二回目の緩解が実現しても、その緩解は同じ理屈で、まったく逃れがたいプロセスにより、いずれ終わる。

時間がその絶対的な力の中にシェリーをとらえていた。時間は彼女に対してたった一つの結果しか持っていなかった：末期癌だ。こうやって彼女の心は状況を解釈していた。この結論に達したので、どんなに気分が良くても、人生でどんな状況が自分に有利に動いていても、この事実は変わらなかった。つまり緩解期の癌患者は、万人の状況を一步高めた状態を示しているわけだ。いずれきみも死ぬ。

心の奥で、シェリーは絶え間なく死のことを考えていた。その他すべて、あらゆる人も物もプロセスも、ただの影でしかなくなってしまっていた。もっとひどいことに、他人のことを考えると、宇宙の不公平さが思い出されてしまうのだった。他のみんなは癌なんかじゃない。つまり彼女の心理からすると、ほかのみんなは死んだりしないということだ。そんなのずるい。みんなが共謀して自分から若さを奪い、幸福を奪い、いずれ命をも奪おうとしてるんだわ。そしてそのかわりにみんなは彼女に無限の苦痛を山ほどしょいこませて、そしてたぶんこっそりそれを楽しんでるんだ。「かれらが普通に楽しんでいる」というのと「自分に苦痛を与えて楽しんでいる」というのは、同じ邪悪なことを指すようになっていた。シェリーはしたがって、世界全体がまとめて地獄に堕ちればいいと思う動機を持っていた。

もちろんそんなことを口に出しては言わなかった。でもその思いを体現していた。癌のおかげで彼女は完全に無快状態となっていた。だれがこの論理を否定できるものか。論理的には、シェリーは緩解中に人生のあらゆる楽しい瞬間を味わい尽くすべきだったが、でもファットがやっと理解したように、心は論理的には動かない。シェリーは自分の緩解が終わるのをいまかいまかと待つことで時を費やしていた。

この意味で彼女は満足を先送りにはしていなかった。戻ってくるリンパ癌を今すでに楽しんでいたのだから。

ファットはこの複雑な心理プロセスをつきとめられなかった。単に、ずいぶん苦しんできて人生でババを引いてしまった若い女が目に入るだけだった。自分なら彼女の人生を改善できると理由づけた。これはよい行動である。彼女を愛し、自分自身を愛すれば、紙様は二人とも愛してくれることだろう。ファットには愛が見え、シェリーには自分がどうしようもない来るべき苦痛と死が見えた。これほどちがった世界が出会うことはあり得なかった。

まとめると（ファット式の言いぐさだ）、現代のマゾヒストは苦痛を楽しむのではない。単に無力感が我慢できないだけだ。「苦痛を楽しむ」というのは意味的に矛盾している、

と一部の哲学者や心理学者が指摘している。「苦痛」は不快に感じるモノとして定義される。「不快」というのは欲しないものとして定義される。それ以外の定義をしてみたらどうなるか、やってみるといい。「苦痛を楽しむ」というのは「不快なものを楽しむ」ということだ。ライクはこの状況を把握していた。現代の希薄化したマゾヒズムの真のダイナミズムをかれは解読した……そしてそれがほとんどあらゆる人に何らかの形である程度は広がっているのを見て取った。マゾヒズムは偏在するようになったのだった。

シェリーが癌を楽しんでいるとって責めるのは不正確だ。癌になりたいと思っていたわけでさえない。でも、目の前のトランプの山には、どこかに癌が混じっているのだと信じていた。そして毎日一枚ずつトランプをめくり、でも毎日癌は出てこなかった。でもそのトランプが山に入っていて、一日一枚めくり続けたら、いずれは癌のカードにあたり、それでおしまいだ。

だから彼女のせいとは言えないことではあるが、シェリーはまさにファットをかつてないほどひどい目にあわせる準備を万端に整えていたのだった。グロリア・クヌードソンとシェリーとのちがいは明らかだった。グロリアは純粋に空想上の理由で死にたいと思っていた。シェリーは自分がどう願おうと文字通り死ぬしかなかった。グロリアは、その悪性の死のゲームをやめようと心理的に思えば、いつでもそれをやめられた。でもシェリーにはそんな選択肢はなかった。まるでグロリアが、オークランドのシナノンビルの下に広がる舗道で自分自身をこなごなにすることで、大きさが二倍になって心の強さも倍増したかのようだった。一方、ベスがクリストファーをつれて立ち去ったことで、ホースラヴァー・ファットは通常の半分の大きさに縮小してしまっていた。明るい結果に終わる見込みはどう考えても低い。

ファットがシェリーに惹かれる実際の脳内動機は、グロリアで始まった死への照準合わせの続きなのだった。でも、ストーン医師が自分を治してくれたと思いこんでいるファットは、いまや希望も新たに世界にのりだしていった。そしてまちがいに狂気と死に向かっていくのだった。何一つ学んでいなかった。確かに弾丸は体から引き抜かれて傷は治った。でも次の一発をくらう準備万端で、それを待ち望んですらいた。シェリーと同棲して彼女を救うのが待ちきれなかった。

ご記憶かもしれないが、他人を助けるというのはファットがずいぶん昔にあきらめろと言われた二つの行動のうち一つだった。人助けとクスリをやめろと言われていたのだ。クスリはやめた。でも全エネルギーと情熱はいまや、人助けに向かうようになったのだった。どうせならクスリを続けていたほうがましだった。

第6章

離婚の歯車がファットをかみ砕いて一人の人物に仕立て、前進して自分自身を破壊できるよう解放してくれた。待ちきれなかった。

一方でオレンジ郡精神科の人々を通じてセラピーも始めていた。担当になったのは、モーリスというセラピストだった。モーリスは普通のセラピストとはちがっていた。60年代にはロングビーチ港を使ってカリフォルニアに銃やヤクを運び込んでいた。SNCCとCOREに所属してイスラエル特殊部隊員としてシリア軍と戦った。身長190センチ、筋肉がシャツの下で盛り上がり、ほとんどボタンがはちきれそうだった。ホースラヴァー・ファットと同じく黒いチリチリのひげをしていた。通常はファットに向かって部屋の反対側に立ち、すわらなかった。ファットをどなりつけ、勧告のあいまに「本気だからな」とはさむのだった。ファットはモーリスが本気でないと思ったことはなかった。それが問題になったことはなかった。

モーリス側のゲームの計画としては、ファットを脅かして人を救う代わりに人生を楽しむようにさせようというものだった。ファットは楽しみという概念を知らなかった。ことばの意味を知っているだけだった。最初、モーリスはファットにいちばん望むものを10個書き出させた。

「望む」という用語は、「やりたいと望む」というような用法だと、ファットを困惑させた。

「おれがやりたいと望んでいるのは、シェリーを助けることなんです。彼女がまた病気にならないように」

モーリスは怒鳴りつけた。「おまえは自分が彼女を助けるべきだと思ってるんだろう。そうすればいい人になれると思ってるな。でもおまえなんか絶対にいい人にはなれんよ。おまえなんか、だれにも何の価値もないんだから」

弱々しくファットは、そんなことはないと反論した。

「このゴミクズ野郎が」とモーリス。

「そういうあんたはデタラメばっかだ」とファットが言うと、モーリスはニヤリとした。モーリスは、自分の望むものを手に入れはじめていた。

「聞けよ。本気だからな。ヤクでもやって、おっばいのかい女とハメ倒してこい、死にかけてような女じゃなくて。シェリーが死にかけてるのは知ってるだろ、な？ 彼女が死んだら、おまえどうすんだよ。ベスのところへでも戻るか？ ベスはおまえを殺そうとしたんだぞ」

「そうなんですか？」ファットは驚愕した。

「そうだと。おまえが死ぬようにし向けた。おまえの息子を連れて消えたら、自殺しようとするのがわかってたんだよ」

「うーん」とファットは言ったが、ちょっとうれしくもあった。自分が被害妄想にはなっていないということだからだ。心の奥底では、ベスが自分の自殺を仕組んだことはわかっていたのだ。

モーリスは続けた。「シェリーが死んだら、おまえも死ぬぞ。死にたいのか？ そんならおれが今すぐ手配してやる」そして、星の位置を含めなんでも示すでっかい腕時計を調べた。「そうだな、今は二時半だから……今晚六時に手配してやろう。どうだ？」

モーリスが本気かどうか、ファットにはわからなかった。でもモーリスにその能力があることは文字通り信じていた

「聞けって。本気だからな。死ぬんなら、おまえがはまっちゃってる方法より楽なやりかたはいくらでもある。わざわざ面倒なやり方をしてるんだよ、おまえは。シェリーが死んだら、自分も死ぬ口実ができるってのがおまえの仕組んだことだ。口実なんかいらなんだぞ 女房と子供に逃げられたとか、シェリーがくたばったとか*1。シェリーが死んだら、おまえは大助かりだ。悲しみと彼女への愛のあまり」

「でもシェリーが死ぬなんてだれが決めたんですか？」ファットは割り込んだ。自分の魔法のような力で彼女を救えると信じていたのだ。これが実はかれの戦略すべての根底にあるのだった。

モーリスはその質問を無視した。かわりに「おまえ、何で死にたいの？」と言った。

「死にたくありませんって」ファットは本気で自分が死にたがっていないと思っていた。

「シェリーが癌でなければ同棲したか？」モーリスは待ったが答えは返ってこなかった。ファット自身も、自分が同棲しなかったらと認めざるを得なかったから返事ができなかったのだ。「何で死にたいの？」モーリスは繰り返した。

「うーん」ファットは途方に暮れた。

「おまえは悪人か？」

「いいえ」とファット。

「だれかに死ぬと言われてるのか？ 声がするとか？ 『死ぬ』というメッセージを送

*1 訳注：大瀧は croak が死ぬという意味なのを知らない。

りつけてるとか？」

「いいえ」

「お袋さんは、おまえに死んでほしかったか？」

「うーん、グロリアが」

「グロリアなんかクソくらえ。グロリアがなんだってんだ。やったこともない女だろう。ろくに知りもしない。そのときおまえはもう死のうとしてたんだよ。くだらご託をぬかすな」モーリスはいつもながら、怒鳴りはじめていた。「本気で人を助けたいなら、ロサンゼルスに行ってカソリック救護会の炊き出しでも手伝ってやるとか、ありったけのお金を CARE に寄付するとかすればいい。人助けはプロに任せろ。自分をごまかすな。グロリアが自分にとって意味があったとか、えーと何てったっけ シェリーだ そいつが死なないとか、おためごかしはよせよ。死ぬに決まってるんだろ！ だからこそおまえは同棲してるんだろ、死ぬとき居合わせられるように。その女、おまえを道連れにしようとしてて、おまえもそうしてほしがってる。二人で共謀してるんだろが。ここのドアを入れてくるやつはみんな死にたがってるんだ。精神病ってのはそういうことだ。そんなことも知らなかったのかよ。いいか。おまえの頭を水につっこんで、生きようとあばれるまで押さえつけてやりたいよ。あばれなきゃ、そのままおだぶつだ。ここの連中がやらしてくれればなあ*2。その癌の友だち 彼女はわざと癌になったんだぜ。癌は肉体の免疫系の意図的な故障を示している。当人が免疫系のスイッチを切るから起きるんだ。それは喪失で起こる、愛する者を失ったときに。そうやって死は広がるんだ。みんな体内にガン細胞がうようよしているけれど、ふつうは免疫系がそれに対処するんだ」

「確かに彼女は友だちをなくしました」とファットは認めた。「てんかんの大発作で死んだんです。それと彼女の母親も癌で死にました」

「つまりシェリーは、友だちが死んで母親が死んだことを後ろめたく思ったんだ。おまえはグロリアが死んで後ろめたく思った。たまには自分の人生に自分で責任を負ってみたらどうだよ*3。自分を守るのはおまえ自身の仕事だぞ」

ファットは言った。「おれの仕事はシェリーを助けることです」

「一覧を見せてみる。ちゃんと一覧は持ってきただろうな」

自分のいちばん望むもの十個を書いた一覧を手渡しつつ、ファットはモーリスが正気だろうかと頭の中で思った。シェリーは死にたがってなんかいない。頑固かつ勇敢に戦ってるじゃないか。癌だけでなく化学療法にまで耐えてるじゃないか。

「サンタバーバラの浜辺を散歩したい、と」モーリスは一覧を見ながら言った。「それが

*2 訳注：ここ訳しもれ。

*3 訳注：ここらへんの口語表現は壊滅状態。

一番か」

「いけませんか？」ファットは身構えて言った。

「いや別に。で？ さっさとやれば？」

「二番を見てくださいよ。いっしょにきれいな女の子がいないと」とファット

モーリスは言った。「シェリーをつれてけよ」

「シェリーは　　」ファットは口ごもった。実を言うと、シェリーにはいっしょに浜辺を散歩しようと申し出たのだった。サンタバーバラに行って、週末を豪勢なビーチホテルで過ごそうと。でも彼女は、教会の仕事が忙しすぎると答えたのだった。

モーリスが補ってくれた。「こないんだな。忙しいんだろ。何やってんの？」

「教会」

二人は顔を見合わせた。

とうとうモーリスが口を開いた。「癌がぶり返したところで、その子の人生は大して変わらんなあ。彼女、自分では癌の話をするのかよ？」

「うん」

「店の店員さんにも？ 会う人みんなに？」

「そう」

「そうか。じゃあぶりかえせば人生変わるよ。もっと同情を集められる*4。彼女もそのほうが幸せだ」

やっとの思いでファットは行った。「前に彼女が言ったんだけど　　」ほとんど言えそうになかった。「癌になったのは自分にとって最高のできごとだったって。だっておかげで　　」

「連邦政府に金をもらえるからだ」

「うん」ファットはうなずいた。

「そうすれば働かずにすむから。どうせ緩解してるのに生活保護はままだらってるんだらう」

「うん」ファットは仏頂面で言った。

「いずればれるぞ。担当医に問い合わせがいく。そうなったら彼女も就職しないと」

ファットは苦々しそうに言った。「彼女は絶対働きませんよ」

「おまえ、その子が嫌いなんだ。もっとひどい。彼女を尊敬もしてない。そいつは女乞食だ。たかり屋じゃないか。感情的にも金銭的にもおまえにたかっている。おまえが喰わせてやってんだろ？ なのに生活保護ももらってる。そいつは詐欺だ。癌詐欺だよ。そのカモがおまえだ」モーリスはファットをじっと見つめた。「おまえ、紙様は信じてるの

*4 訳注：大瀧訳では意味不明。

か？」いきなりかれは尋ねた。

この質問から、ファットがモーリスとの治療セッションでは紙様談義を控えていたことはわかるだろう。二度と北病棟送りはごめんだった。

「ある意味ではね」とファットは答えた。でもそこで抑えられなかった^{*5}。話をでかくせずにはいられなかった。「おれは独自の紙の概念を持っている。自分自身の」ファットは自分のことばが作る罫を思い描いた。有刺鉄線まみれの罫を。「考えに基づいて」と文を終えた。

「これって何か話しにくい話題なのか？」とモーリス。

^{*5} 訳注：大瀧訳では lie の意味をとりちがえている。let it lie は、そのまま寝かしておくという意味。大瀧は、ウソをつくという意味にとりまわっている。

補遺

論説：秘密教典

1. 一つの「精神」がある。でもその下で二つの原理が争っている。
2. その「精神」は光を招き入れ、それから闇を招き入れる。その相互作用によって時間が生成される。最終的に、「精神」は光の勝利を宣言する。時間は止まり、「精神」は完全となる。
3. かれは物事の見かけを変えることで時間が過ぎたように見せかける。
4. 「精神」の前には物質は可変だ。
5. かれはずっと昔に暮らしていたが、いまなお生きている。
6. 実時間は C.E.70 年にエルサレム神殿の崩壊とともに止まった。そして 1974 年にまた動き出した。その間の時期は、「精神」の「創造」を猿まねしているだけの、まったく偽の穴埋めだ。
7. 休眠状態の種子の形で、生きた情報として、プラスマテハチェノボスキオンの埋められた文書図書館で紀元一九四五年までまどろんでいた。イエスがあいまいに『芥子の種』で言っていたのはそういうことだ。その種は『鳥たちが巣を作るほど大きな木へと育つ』とイエスは言った。イエスは自分自身の死だけでなく、すべてのホモプラスマテたちの死を予見していた。かれは文献が発掘され、読まれ、プラスマテが交接する新しい人間宿主を差 g しだすのを予見していた。だがかれは、プラスマテが二千年近くも不在となることも予見した。
8. 生きた情報として、プラスマテは人間の視神経を溯り、松果体にたどりつく。プラスマテは人間の脳を雌の宿主として使い自分自身を複製して活性形態となる。これは異種間共生だ。ヘルメス学の錬金術師たちは、古代の文献からこれを理論的には知っていたものの、再現はできなかった。なぜならかれらは休眠状態の埋まったプラスマテを見つけられなかったからだ。ブルーのは、プラスマテが帝国によって破壊されたのではないかと考えた。これをにおわせたためにかれは火あぶりとなった。「帝国は終わっていなかった」
9. Dico per spiritum sanctum. Haec veritas est. Mihi crede et mecum

in aeternitate vivebis.

10. 現象界は存在しない。それは「精神」が処理した情報の実体化だ。
11. われわれが「世界」として経験する、変化する情報は、展開する物語だ。その物語はある女の死について語る。この女性は、ずっと昔に死んだけれど、原初の双子の片割れだった。彼女は聖なるシジギイの半分だった。この物語の目的は、彼女とその死を階層することだ。「精神」は彼女を忘れたくない。だから「脳」の推論は彼女の存在の永久記録で構成され、それを読めば、そういうふうに理解できるだろう。「脳」が処理する情報のすべて それはわれわれにとっては、物理的な物体の配置と並べ替えとして経験される は、この彼女を保存しようという試みだ。石ころや岩や棒きれやアメーバは、彼女の痕跡なんだ。彼女の存在と世界の記録は、いまや孤独となった苦しむ「精神」によって、現実のいちばん卑しい水準の上に秩序化されている。
12. この孤独、この後に残された『精神』の苦悶は、宇宙のあらゆる構成要素に感じられた。その構成要素はすべて生きている。だから古代ギリシャ思想家たちは物活主義者だった。
13. 「精神」はわれわれに語りかけてはならず、われわれを手段として語っている。その語りがわれわれを通過して、その哀しみが不合理な形でわれわれを満たす。プラトンが気がついたように、世界の魂には一筋の不合理なものがある。
14. この情報、あるいはこの叙述は、自分の中の中立的な声として聞くことができるはずだ。でも何かがおかしくなった。すべての創造物は言語だし、言語以外の何物でもないのだけれど、でもそれは何か説明のつかない理由のために、われわれは外にあるものを読むこともできないし、自分の中で聞くこともできない。だから、われわれは白痴になったんだと言おうか。なにかがわれわれの知性に起こった。おれの理由づけはこうだ：脳の部分の並び方が言語だ。われわれは脳の一部だ。したがってわれわれは言語だ。だったら、なぜわれわれはこれを知らないのか？ われわれは自分がなんであるかさえ知らず、まして自分がその一部を構成する外的現実が何なのかなんてまるで知らない。「白痴」ということばの期限は「私的」ということばだ。われわれはそれぞれ、私的存在となってしまう、もはや脳の共通の思考を共有していない 識閾下の水準以外では。よってわれわれの実際の生活と目的は、われわれの識閾以下で執行されている。
15. 脳の思考は、われわれには物理的宇宙の中の並び方や並び替え 変化 として体験される。でも実は、それは実際にはわれわれが物質化している情報と情報処理なのである。われわれは脳の思考を単なる物体として見るだけでなく、むしろ物体

の運動、あるいはもっと正確には、物体の配置として見る。でも並び方のパターンは読み取れない。そこにある情報を抽出することはできない。つまりそれを、その実体である情報としては引き出せない。脳による物体の結びつけや結び直しは、実は言語なのだけれど、でもわれわれの言語のようなものじゃない(というのもそれは自分自身に向かってのもので、自分の外のだれかや何かに向かってのものじゃないからだ)。

16. 「精神」は喪失と哀しみのため発狂してしまった。よってわれわれは、宇宙、つまり「脳」の一部なんだから、部分的に発狂している。
17. 二つの領域がある。上と下だ。上の領域は超宇宙Ⅰまたは陽、パルメニデスの第一形態から派生したもので、意識があり、近く力もある。下の領域、または陰、パルメニデスの第二形態は、機械的であり、盲目的で高効率な原因で動き、決定論的で知性をもたない。それは死んだ源から発するものだからだ。古代にはそれは「アストラル決定論」と呼ばれていた。われわれはおおむねこの低い領域にとらわれているけれど、秘蹟を通じて、プラスマテを手段として、解放される。われわれはあまりに封じ込められているので、アストラル決定論が破られるまで、われわれはそれがあることにさえ気がつかない。『帝国は実は終わっていなかった』。